

2020 年度 SDGs 未来都市等提案書(提案様式1)

令和2年2月28日

与謝野町長 山 添 藤 真

提案全体のタイトル	みえるまち ～地域資源の安心安全を活かした循環社会の構築～
提案者	京都府与謝野町
担当者・連絡先	

1. 全体計画（自治体全体でのSDGsの取組）

1.1 将来ビジョン

（1）地域の実態

（地域特性）

〈地理・歴史〉

当町は、総面積 108km²（森林面積 82km²、総面積 76%）の範囲に約 21,000 人が暮らし、南北約 20 kmの間に町並みや集落が連なる、住民の顔が見え、住民の声を聞くことができる、まとまり良い地域である。大江山連峰をはじめとする山並みに抱かれ、野田川流域に広がる肥沃な平野から、天橋立を望む阿蘇海へ流れるように続く景観は、四季折々に美しい姿を作り出している。春は新緑、夏はひまわり、秋は黄金色の稲穂と紅葉、冬には季節風の「うらにし」による雪と、季節毎で味わいある自然美が堪能できる。

京都府北部の、日本海に面した丹後半島の尾根を背に、南は福知山市、東は宮津市、北は京丹後市、西は兵庫県豊岡市に接し、国道 176 号、178 号、312 号の結節点であり、交通の要所である。京都市から北西へ約 80 kmに位置し、京都縦貫自動車道、山陰近畿自動車道を利用し、京都市内からも車で約1時間 30 分の距離にあり、季節に応じて都市部からも多くの方が遊びに訪れる。



〈人口動向〉

人口については、第2次世界大戦後から第2次ベビーブーム(1971～1974 年)が終わるまで微増で推移していたが、その後、人口減少が続き 2015 年国勢調査人口は 21,834 人となり、2040 年には 13,722 人(国立社会保障・人口問題研究所 平成 30 年推計)まで減少すると推計されている。

〈産業〉

当町の地域経済を支えてきた産業は、織物業及び農業である。

「丹後ちりめん」に代表される織物業は、約 300 年前に先人たちの努力によって京都西陣から持ち帰られ、惜しむことなく地域に伝えられたこと、雨が多く、湿度が高い気候風土が絹織物の生産に適していたことから地場産業として根付いたが、和装産業の衰退と比例して現在はピーク時の 30 分の 1 の生産量にまで減少している。

しかしながら、世界的にみても高い製織技術を有していることから、和装だけでなく近年は洋装分野でも高い評価を受けており、新たな商品の開発、販路の開拓が行われ、今なお日本における最大の絹織物総合産地として認識されている。

農業については、一般財団法人日本穀物検定協会が主催する米の食味ランキングにおいて特Aを西日本で最多獲得するなど高品質のコシヒカリの産地であり、有機質肥料を活用する自然循環農業の推進にも力を入れている。また、産官学民連携の与謝野町スマートグリーンビレッジ確立協議会を設立し農業に ICT を導入する取組を 2014 年度から試験的に実施し、現在では ICT 機器を圃場に導入し、ベテラン農業者のデータ取得と活用による担い手の育成や新しい品目ホップの栽培技術の確立にも導入、獣捕獲がわかるセンサーを導入するなど、最新技術の導入を進めながら農地の保全と担い手育成を図っている。

このように織物業と農業が産業の中心にあり、中小企業が町内事業所の大多数を占めていることから、持続可能なまちづくりを進めていくためには、地域経済と地域社会の担い手である中小企業の発展が不可欠である。そこで中小企業の振興を重要課題として位置付け、平成 24 年度に京都府内で初めて中小企業振興基本条例を制定し、「まちぐるみ」で地域循環型経済の構築を図ることとしている。

〈環境保全〉

京都府宮津市と当町に位置する「阿蘇海」は、日本三景「天橋立」によって囲まれた内海(閉鎖性水域)であり、「金樽イワシ」や「アサリ」などの漁業が盛んな美しく豊かな海であったが、高度経済成長期以降の工業生産の増大、農業の化学肥料への転換、周辺住民の生活様式の変化等の要因により、流入負荷が増大。富栄養化によるヘドロの堆積や、水質及び底生生物の生息環境の悪化、上流域や沿岸からのゴミの漂着等の課題が顕在化してきたため、美しく豊かな阿蘇海を取り戻し、次世代に継承していくため、平成 28 年 4 月に「美しく豊かな阿蘇海をつくり未来へつなぐ条例」を制定し、かつての美しく豊かな里海

「阿蘇海」の再生に向け、住民・大学生・行政が一体となって取組を進めている。

（今後取り組む課題）

当町は、大江山連峰をはじめとする分水嶺に囲まれ地理的にも閉鎖的な環境であるため、町の中心を流れる2級河川野田川は肥沃な農地の中心を流れ、天橋立・阿蘇海へ続いている。当町で生まれた水のほとんどが天橋立・阿蘇海へ注ぐという地理的構造となっていることから、まずは町内の山・川・海を安心安全で豊かな資源として保全しなければ持続可能なまちとはならず、人の暮らし営みもなく、人の往来もない。

このことから、上流から下流、そして内海までの流域全体の環境保全の取組を重要課題とし、かつ安心安全で豊かな資源に恵まれたこの町だからこそその地域資源を活かし、持続可能な循環社会を創り上げることが重要となる。

これらの取組は、地理的に閉鎖的な環境で環境保全活動を実践し、成果を出すことが日本のモデルとなると考えられる。大江山連峰から野田川、阿蘇海までの環境保全活動の中で中心となるのは、面積的に大部分を占める農業であることから、環境保全農業の推進は特に重要となる。

（2）2030 年のあるべき姿

【2030 年のあるべき姿】

当町の産業を育み、暮らしを支えているのは、大江山連峰から野田川、阿蘇海へとつながる肥沃で豊かな自然環境であるため、次の2つの視点で将来像を示す。

1. 豊かな自然環境の保全

町内の山・川・大地、海はすべて根幹となることを認識し、これらの自然が安心安全で豊かな資源として保全できおり、ここで安心安全な暮らし、営みがある状態を目指す。



大江山連峰などの山並みと、野田川流域に
広がる肥沃な平野



天橋立を望む阿蘇海

2. 持続可能な自然循環社会と価値の創出

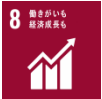
安心安全で豊かな資源に恵まれたこの町だからこそ、保有する潜在的資源（人・自然・産業・文化）の価値（安心安全・個性・もてなし）を「みえる」化し、活かし、自発的な挑戦と連携によるさまざまな価値が創出される環境を目指す。

また、基幹産業の農業、織物業を中心に、地域内外のよさの愛にあふれたキラリと光る人財が連携し新たな仕事が創出される環境を整えることで、持続可能な循環型社会を創り上げ、次の世代にまちをつないでいく。



(3) 2030 年のあるべき姿の実現に向けた優先的なゴール、ターゲット

(経済)

ゴール、 ターゲット番号	KPI(任意記載)	
 8.2 8.4 8.9	指標: 自然循環農業の拡大	
	現在(2019 年 12 月):	2030 年:
	与謝野町産有機質肥料を使用した栽培面積 135 ha	与謝野町産有機質肥料を使用した栽培面積 200 ha
 9.4	指標: 産業人材の育成	
	現在(2019 年 12 月): 認定農業者の育成 37 名	2030 年: 認定農業者の育成 50 名
 15.1	指標: 産業資本の確保	
	現在(2019 年 12 月): 優良農地の確保 777 ha	2030 年: 優良農地の確保 777 ha(現状維持)

農作物の加工過程で生まれた天然素材を肥料化し、次の農作物に活かすことで、循環のサイクルを作り出す当町の自然循環農業※の推進を加速させ、高付加価値農産物の生産を促進する。この取組を通じて優良農地を確保するとともに、担い手となる産業人材の育成を推進し持続可能性を向上する。

<自然循環農業>

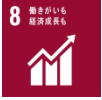
おから、米ぬか、魚のあらといった天然素材から町直営工場で製造する有機質肥料「京の豆っこ肥料」は力強い土を育て、かつ河川・海の汚染を最小限にとどめる。大地は肥沃に保たれ、水は美しく循環する。その恩恵がまた次の農作物に活かされる。このような自然に優しく循環構造となっている農業で 2000 年から推進している。



与謝野町産有機質肥料「京の豆っこ」



優良農地の確保

(社会)		
ゴール、 ターゲット番号	KPI(任意記載)	
 11.4	指標:「老若男女がイキイキする与謝野(まち)」づくりを推進 縮小する社会にあっても、自然・産業・環境・文化を守り、住む人やこの地域が輝くまちづくりを推進	
	現在(2019 年 12 月): 人口:21,373 人	2030 年: 人口:19,000 人
 8.5	指標: 多様な人材の活躍推進	
	現在:(2019 年 12 月) 障害者雇用の事業所数※累計 4 事業所 高齢者の活躍 現在:(2018 年 3 月) シルバー人材センター登録者数 170 人	2030 年: 障害者雇用の事業所数※累計 10 事業所 高齢者の活躍 2030 年: シルバー人材センター登録者数 190 人
 5.5 5.B	女性の活躍 現在:(2019 年 12 月) 審議会等への女性の登用率 27.1 %	女性の活躍 2030 年: 審議会等への女性の登用率 30.0 %

当町では、高齢化と人口減少により、さまざまな分野で担い手不足が深刻化している。担い手不足を補うため、多様な価値を認めて誰でも活躍でき、地域全体で協力しあう社会を構築する。




女性・若者が輝くまちづくり
 農産加工など農業分野での障害者の活躍

(環境)

ゴール、 ターゲット番号	KPI(任意記載)	
 	指標: 自然環境の改善	
	14.1 現在(2019 年 12 月): 野田川のBOD値 ND ※定量下限値以下	2030 年: 野田川のBOD値 ND(現状維持) ※定量下限値以下
	指標: 環境意識の改善	
	12.5 現在(2019 年 12 月): 一人当たりのゴミ排出量 958 g/日	2030 年: 一人当たりのゴミ排出量 900 g/日

分水嶺に囲まれ地理的に閉鎖的な環境であることから、大江山連峰等の山々から農地、野田川、そして阿蘇海にかけて流域全体の環境保全に取り組む。

また、環境に負荷をかけるそもそもの要因の一つであるゴミの排出抑制と再資源化を推進する。



異常繁殖した牡蠣（景観阻害）



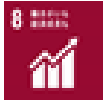
海藻・牡蠣殻の撤去作業

1.2 自治体 SDGs の推進に資する取組

(1) 自治体 SDGs の推進に資する取組

2030 年のあるべき姿を実現するため、今後 3 年間に先導的に進める取組の概要を以下にまとめた。

① 環境保全型農業の推進

ゴール、 ターゲット番号	KPI(任意記載)	
 8.4  14.1	指標: 与謝野町産米の振興の取組	
	現在(2019 年 12 月): 与謝野町産米の地産他消の推進 145 t/年(2018 年産) 与謝野町産米の輸出拡大 60 t/年	2022 年: 与謝野町産米の地産他消の推進 165 t/年(2021 年産) 与謝野町産米の輸出拡大 100 t/年

自然循環農業による農産物の栽培面積を拡大し生産量と流通量を増やす。

② 環境教育の実施

ゴール、 ターゲット番号	KPI(任意記載)	
 4.7	指標: 環境教室の参加者	
	現在(2019 年 12 月): 90 人/年	2022 年: 150 人/年

阿蘇海の環境改善などの流域の環境をフィールドにした環境教育を実施する。

③ 地域資源の循環の推進

ゴール、 ターゲット番号	KPI(任意記載)	
 12.5	指標: 地域資源を活用した与謝野町産の有機質肥料数	
	現在(2019 年 12 月): 1 種類	2022 年: 3 種類

阿蘇海に異常繁殖する牡蠣の殻や京都府北部のカニ殻など通常は産業廃棄物となるものを資源として活用し新たな肥料を開発する。

(2) 情報発信

(域内向け)

実践者である農業者に対しては、毎年数回開催している農家組織代表者会や農業座談会において、実践者の育成を含めた情報提供を行う。

併せて町広報誌、町ホームページ、町有線テレビを活用し広く町民へ SDGs の取組を普及する。また、「人財」育成を目的として開催している「よさのみらい大学」においても SDGs の取組について実践者の育成などを行う。

また、全自治会の代表者で構成される与謝野町区長連絡協議会においても SDGs の取組事例などを紹介するなど普及を図る。

(域外向け（国内）)

京都府北部の自治体5市2町（舞鶴市、福知山市、綾部市、宮津市、京丹後市、伊根町及び与謝野町）で構成する京都府北部連携都市圏形成推進協議会では、人口減少・高齢化など同様の課題を抱えておりさまざまな連携活動を展開している。連携都市圏内で SDGs の取組を共有し普及を図る。

また、農村が抱えるさまざまな課題にICTを活用し「地域社会の維持」と「人の豊かさの実現」を目指すことを目的として設立された「与謝野町スマートグリーンビジレッジ確立協議会」は、5 大学 4 企業他の 17 団体で構成されている。各構成団体は、強い情報発信の力があることから連携し、SDGs の取組を共有し普及することができる。

(海外向け)

昭和 59 年からウェールズ アベリスツイス町と国際交流を行っている。平成 4 年からは友好の架け橋として未来ある高校生の相互派遣交流を進め毎年度受け入れと派遣を行い、年々交流が深まっている。派遣中の次世代を担う若者に当町の SDGs の取組を普及することで国外での普及を図る。

また、近年は、農業、織物関係で海外からの視察があることから、視察プログラムに SDGs の取組を盛り込むことで普及を図る。

(3) 普及展開性(自治体 SDGs モデル事業の普及展開を含む)

(他の地域への普及展開性)

当町は、地理的分水嶺に囲まれており海から山までが一つの谷で形成されており、森林面積が 75%、農地面積が 10%の中山間地域である。

日本の中山間地域は、農業が産業の中心である地域が多く、環境に配慮した農業の取組が求められている。農業に配慮することは、河川にも影響し、その先の海にも影響を与える。

海から山まで環境に配慮した取組を農業者、地域住民、地元企業などによる協働で実施することは全国の中山間地域に普及できる可能性は十分にある。

(自治体 SDGs モデル事業の普及展開策)

2000 年から取り組んできた環境保全型農業は、関係者の努力により徐々に拡大を見せ、河川の環境改善など成果が伴う取組にまで発展しつつある。近年では、新たな農作物栽培への挑戦と環境保全型農業が両輪で展開させるなどさまざまな分野で持続可能な取組が定着するまでに至った。これらの取組はその都度、町の広報誌や町有線テレビによる周知、関係団体との連携により普及を図ってきたが、町ブランドサイトを SDGs の考え方と現在の取組を融合させ SDGs に特化したサイトに変更することや、メディアと連携した PR、与謝野町産の有機質肥料を使用している認証制度のアップデート、取組の価値に共感し新たな挑戦を始めようとする町内外の方々の伴走、協働等で普及を図る。

1.3 推進体制

(1) 各種計画への反映

1. 第2次与謝野町総合計画

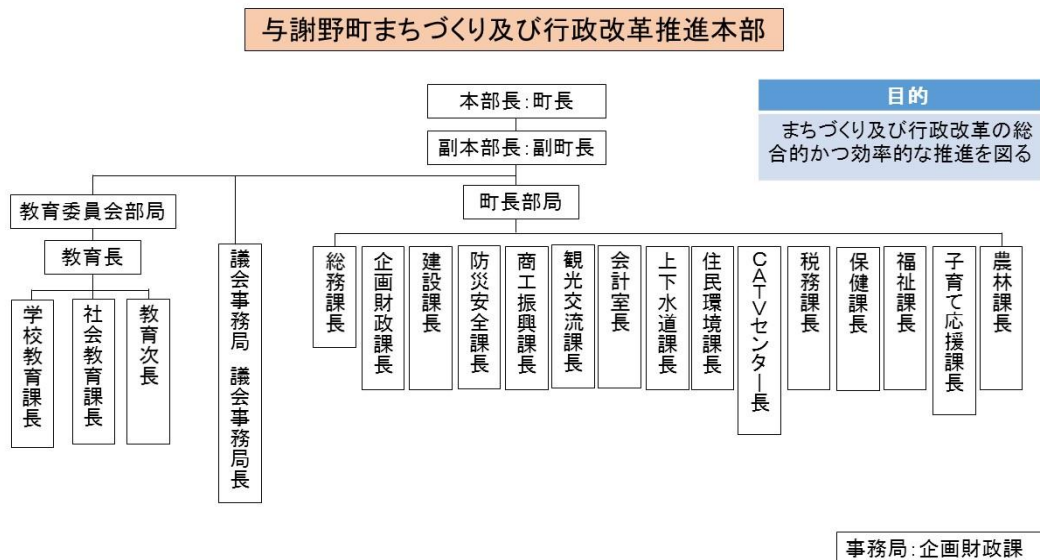
第2次与謝野町総合計画(基本構想 2018～2026、前期基本計画 2018～2022)においては、人口減少下においても持続可能なまちをつくるため、2060 年以降に 16,000 人前後で落ちつく「おおむね人口維持」を長期的目標として掲げており、SDGs の推進計画に準ずるものと位置付け、後期基本計画(2023～2026)には、SDGs を盛り込んだ計画へ改訂する見込み。なお、事業の進捗を点検・見直しする中でも、SDGs の視点で行う。

2. 第2期与謝野町ひと・しごと・まち創生総合戦略

第2期創生総合戦略(期間:2020～2024)においては、本人口ビジョンで掲げている 2060 年以降に 16,000 人前後で落ちつく「おおむね人口維持」を目標に、縮小する社会にあっても、ここに住む人やこの地域が輝き「老若男女がイキイキする「与謝野(まち)」づくりを推進することとした。なお、町が取組を進めてきた活動を SDGs の取組に位置付けるなど SDGs の推進を進め持続可能なまちづくりを展開することとしている。

(2) 行政体内部の執行体制

町長、副町長、教育長のほか全部局長で構成し、まちづくり全般の重要課題及び行政改革の総合的かつ効率的な推進を図るために設置している「与謝野町まちづくり及び行政改革推進本部」を与謝野町 SDGs まちづくり推進本部とし、SDGs の推進に全庁的に取り組む。



(3)ステークホルダーとの連携

1. 域内外の主体

本事業の取組は、町民と町民等で組織するまちづくり団体が主体となり実施していくことから、行政から町民やまちづくり団体に対して情報提供を行うことにより、一層の主体性の向上を図る。また、主体と行政の連携を密にし、町民と団体、団体と団体が連携することにより効果的な取組の推進を図る。

●与謝野町区連絡協議会

町内には 24 の自治会があり、自治会にはほとんどの町民が加入している。町は、以前から区長を通じて区民へ情報提供などを行ってきたことから、引き続き区長連絡協議会を通じて区民へ SDGs 取組などの情報提供を図っていく。

●農家組織代表者会議

すべての自治会に農地があることから、地区ごとに農家が組織化されている。毎年農業政策の情報提供を行う農家組織代表者会議にて、実践者となる農業者に対して農業分野における取組の実践を依頼する。

●阿蘇海環境づくり協働会議

地域住民、関係団体、行政が連携を強化し、一体となって阿蘇海環境改善を目指すことを目的に阿蘇海環境づくり協働会議を立ち上げて、安全で衛生的な生活環境の実現を目指しており、地域全体へ普及することができることから連携を図る。

●与謝野町スマートグリーンビジレッジ確立協議会

構成員は、5大学他17組織あることから他地域での普及を依頼するとともに、協議会の目的である情報通信技術や未来技術を活用し農業後継者の育成を図るため連携して取組を拡大する。

2. 国内の自治体

京都府の北部に位置する7市町(福知山市、舞鶴市、綾部市、宮津市、京丹後市、伊根町及び与謝野町)は、「京都府北部地域連携都市圏形成推進協議会」を設置し、それぞれの市町の強みを活かした役割分担と機能強化を図り、中核市にも匹敵する公共サービスや都市機能を備えることにより、京都府北部を一つの経済・生活圏として地域の活性化を図る取組みを進めている。協議会の中で SDGs の取組を紹介し京都府北部全域に SDGs の取組を普及する。

3. 海外の主体

ウェールズ アベリスツイス町は、ウェールズ の西海岸沿いに位置する町である。第2次世界大戦時に町内にある旧大江山ニッケル鉱山で亡くなった戦友の慰霊碑の除幕式のために、捕虜であった方が昭和 59 年に当町(旧加悦町)を訪問したのをきっかけに始まり、現在も各年で高校生の交換留学の取組が行われている。友好都市としての協定はないが、ウェールズ アベリスツイスへ町への普及を図る。

(4) 自律的好循環の形成へ向けた制度の構築等

当町では、与謝野町産の有機質肥料を使用している認証制度を 15 年前から実施している。持続可能な取組が世界中で展開されていることから、経済 環境 社会の三側面をつなぐ統合的取組を実践したことを認証する上位の基準を設け、認証制度をアップデートし、価値をマネタイズ(収益化)し価値の共感を図る。



自然循環農業パンフレット



認証シール

2. 自治体SDGsモデル事業（特に注力する先導的取組）

2.1 自治体 SDGs モデル事業での取組提案

（1）課題・目標設定と取組の概要

（自治体 SDGs モデル事業名）

みえるまち ～地域資源の安心安全を活かした循環社会の構築～

（課題・目標設定）

ゴール 8、ターゲット 4

ゴール 7、ターゲット 2

ゴール 9、ターゲット 4

ゴール 11、ターゲット a

ゴール 14、ターゲット 1



（取組概要）

当町でこれまで推進してきた自然循環農業を機軸に、野田川流域の農地・河川、天橋立・阿蘇海の環境保全、安心安全な地域で暮らす人々の誰もが活躍し、地域資源を活かした価値を創造することで、経済・環境・社会のそれぞれが連動した循環社会の構築を目指す。

(2) 三側面の取組

① 経済面の取組

ゴール、 ターゲット番号	KPI	
	指標：環境保全型農業の振興の取組	
 8.4	現在(2019 年 12 月): 与謝野町産米の地産他消の推進 145 t(2018 年産)/年	2022 年: 与謝野町産米の地産他消の推進 165 t(2021 年産)/年
 14.1	与謝野町産米の輸出拡大 60 t/年	与謝野町産米の輸出拡大 100 t/年
 15..1	ホップなど新しい作物の栽培促進 収穫量 1.1 t/年	ホップなど新しい作物の栽培促進 収穫量 5.0 t/年

① -1 与謝野町産米の地産他消の推進

当町では、与謝野町産米を加工する施設を有しており指定管理であり第三セクターの加悦ファーマーズ(株)が与謝野町産米をした丹後のバラ寿司などを製造している。現在の年間145tを農業者から直接買い取る取組を拡大し、農業所得の向上と施設における町民の雇用の創出など複合的な効果の拡大を図る。

①-2 与謝野町産米の輸出拡大

国内の米をめぐる情勢は、国民の高齢化により一層の消費の減少が見込まれている。しかしながら、世界では和食がユネスコ無形文化遺産に登録されるなど和食のニーズが拡大している。この様な背景から、町内の農地適格化法人は和食ブームを追い風に与謝野町産米の輸出の取組を開始し、2019 年には 60tを輸出した。和食へのニーズはまだまだあることから、与謝野町産米の輸出拡大、国内の米の飽和状態の改善を図る取組を推進する。

① -3 ホップなど新しい作物の栽培促進

耕作放棄地の防止のために、米に代わる環境保全型の新しい作物の栽培を推進する。東北・北海道で主に栽培されているホップの栽培面積が減少傾向であることから、当町でホップの産地づくりを行い市場への供給を図る。

(事業費)

3年間(2020～2022 年)総額: 24,000 千円

② 社会面の取組

ゴール、 ターゲット番号		KPI	
	10.2	指標: 障害者の活躍	
		現在(2019 年 12 月): 農福連携による障害者雇用 29 名	2022 年: 農福連携による障害者雇用 33 名
	5.5 5.B	指標: 女性の活躍	
		現在(2019 年 12 月): 認定農業者、認定新規就農者、農業委員の女性数 4 名	2022 年: 認定農業者、認定新規就農者、農業委員の女性数 6 名
	11.a	指標: 関係人口拡大等による移住定住世帯	
		現在(2019 年 12 月): 移住定住世帯数 0 世帯	2022 年: 移住定住世帯数 5 世帯

② -1 農福連携による障害者の活躍

中山間地域である条件不利農地を約 50%有する当町は、農業者の高齢化による農業人口の減少による急激な耕作放棄の拡大が予想されていることから担い手確保の対策が求められている。

この課題に取り組んでいるのが、社会福祉法人の農業への参入である。都市農村交流施設でのレストラン経営、ジャム・ジュースなどの農産加工、京野菜などの栽培による複合経営が行われている。地域と連携し経営面積拡大するなどの農業振興を図り、障害者の活躍の場を創る。

③ -2 女性の活躍

当町では、自治会の 3 役への登用は 0 人であるなど女性の登用率が低いことから女性の活躍が喫緊の課題である。農業現場も同様であることから、女性経営者の育成を図り農業経営に女性の視点を入れる取組を進める。

④ —3 関係人口拡大等による移住定住世帯

当町のまちづくりに共感する方はSNSのフォロワーなどの状況から増加傾向にあるが、移住定住の対策が遅れている。移住希望者は、移住者が活躍している地域へ集まるうえ移住先で更なる活躍を志したい方が多い。地域住民と連携して移住者の活躍の場を提供するなど移住定住促進の取組を進める。

(事業費)

3年間(2020～2022 年)総額:65,360 千円

③ 環境面の取組

ゴール、 ターゲット番号	KPI	
 14.2	指標: 阿蘇海の水質改善 現在(2019 年 12 月): 野田川の BOD 値の改善 ND ※定量下限値以下 2022 年: 野田川の BOD 値の改善 ND(現状維持) ※定量下限値以下	
 7.2	指標: 自然エネルギーの拡大 現在(2019 年 12 月): 生ごみ等を活用したバイオガス 発電 0 mwh/年 バイオディーゼルの活用 利用農家 2 名 2022 年: 生ごみ等を活用したバイオガス 発電 1,294 mwh/年 バイオディーゼルの活用 利用農家 4 名	

② —1 野田川の BOD 値の改善

当町は、大江山連峰をはじめとする山の頂上から天橋立の内海である阿蘇海まで一つの谷で町の中心を 2 級河川野田川が流れ一つの町を形成している。高度成長期からのライフスタイルの変化により野田川へ栄養分が流出するなどの平成になってから下水道の整備が始まり、徐々に野田川の水質は改善してきた。また、京都府による河川整備や野田川の水質改善によって、現在では天然のシャケが遡上するまで野田川の水質は改善するに至った。野田川の水質が阿蘇海に与える影響はかなり大きいことから、引き続き住民参加による河川の水質改善を図る。

③ -2 自然エネルギーの拡大

当町では、以前からゴミの資源化を促進しており、現在は 15 種類の分別を行っている。
2019 年度に宮津与謝環境組合（与謝野町、伊根町、宮津市）が整備を進めてきた広域のエネルギー回収型廃棄物処理施設が完成する。生ゴミなどからメタンガスを発生させ発電を行い余剰電力は売電する機能を有する施設である。当町にとっては、バイオマス由来の発電は初めての取組となることから分別の仕組みを引き継ぎし計画どおりの発電を目指す。

（事業費）

3年間（2020～2022 年）総額：1,777,950 千円

（3）三側面をつなぐ統合的取組

（3-1）統合的取組の事業名（自治体 SDGs 補助金対象事業）

（統合的取組の事業名）

YOSANO Agricycle ステージアップ構築事業

（取組概要）

すべては自然循環農業の取組が基軸となっていることから、当取組の拡大を通じて自然・産業・環境・文化そして人に注目しその価値をみえる化し、地域の価値を内外に周知、認識、体感させ、さらに新たな価値の創出を促進する循環社会によって持続可能なまちづくりを行う。

（事業費）

3年間（2020～2022 年）総額：14,000 千円

（統合的取組による全体最適化の概要及びその過程における工夫）

2000 年から取り組んできた自然循環農業について、その理念・循環の仕組みは既に多くの関係者に認知されているが、経済、社会、環境それぞれの分野での取組を SDGs の視点により融合、みえる化した SDGs 特化サイトを構築することにより、全体最適を図る。

また、取組を持続するために、SDGs を意識した新たな学びや実践ができる場として「まちなかまるごとキャンパス よさのみらい大学」を展開する。

(3-2) 三側面をつなぐ統合的取組による相乗効果等(新たに創出される価値)

(3-2-1) 経済⇄環境

(経済→環境)

KPI (環境面における相乗効果等)	
指標: 土壌の流出抑制	
現在(2019 年 12 月): 耕作放棄地面積 7.06 ha	2022 年: 耕作放棄地面積 7.06 ha(現状維持)

当町には、指定管理であり第三セクターの加悦ファーマーズ(株)が与謝野町産米を使用した丹後のバラ寿司などを製造している。現在は、年間 145tを農業者から直接買い取る取組をしている。生産から加工まで町内で実施することは、コメの物流にかかるコストや CO2 削減、また町民の雇用の創出など複合的な効果を生み出している。生産者から米を直接買い取る取組を拡大し、米価下落による農業者の生産意欲の低下を防ぎ耕作放棄発生による土壌の流出を防ぎ阿蘇海の環境改善を図る。

(環境→経済)

KPI (社会面における相乗効果等)	
指標: 地域資源の循環	
現在(2019 年 12 月): 牡蠣殻の肥料としての活用 0.8 ha バイオディーゼルの農地での活用 1070 ㍔	2022 年: 牡蠣殻の肥料としての活用 2 ha バイオディーゼルの農地での活用 1200 ㍔

ボランティアや地元住民が回収した牡蠣殻を農地に還元することで肥料代の削減に繋げる。

また、町内のNPOが天ぷらなどの食用油から精製するバイオディーゼルの農業用機械での活用を推進し化石燃料からの脱却を促進する。

(3-2-2) 経済⇄社会

(経済→社会)

KPI（社会面における相乗効果等）	
指標：農・食による定住の促進	
現在（2019 年 12 月）： 就農、6次産業化、農商工連携 による定住促進 7 名	2022 年： 就農、6次産業化、農商工連携 による定住促進 10 名

農業が町の主産業であることから、食に着目した起業の促進図り定住を促す。

(社会→経済)

KPI（経済面における相乗効果等）	
指標：多様な担い手の確保について	
現在（2019 年 12 月）： 農福連携における障害者の雇用 29 名	2022 年： 農福連携における障害者の雇用 33 名

農業者の高齢化に伴い、農業人口の減少が加速化する。そのため多様な方の活躍を支援し、優良農地の確保と経済の活性化を図る。

(3-2-3) 社会⇄環境

(社会→環境)

KPI（環境面における相乗効果等）	
指標：ゴミの分別による資源化の促進	
現在（2018 年 3 月）： 町民一人一日あたりのゴミの排出量 958 g／人・日	2022 年： 町民一人一日あたりのゴミの排出量 900 g／人・日

ゴミの資源化を促進し、ゴミの排出量の削減を図る。

KPI（環境面における相乗効果等）	
指標：田んぼダムを活用した防災の促進	
現在（2018 年 3 月）： 田んぼダムの面積 0 ha	2022 年： 田んぼダムの面積 5 ha
町内の田の畦を高くすることで、豪雨時の雨水を溜める機能を強化し、洪水の発生を抑える取組を推進する。 （環境→社会）	
KPI（社会面における相乗効果等）	
指標：地元住民と連携によるボランティア活動を通じた関係人口の拡大	
現在（2019 年 12 月）： 阿蘇海の牡蠣殻回収のボランティア参加者数 30 名	2022 年： 阿蘇海の牡蠣殻回収のボランティア参加者数 50 名
異常繁殖した阿蘇海の牡蠣殻の回収などの町外の大学生や地域住民が参加する機会を捉え、関係人口づくりを推進する。	
KPI（社会面における相乗効果等）	
指標：身近な環境問題を意識した女性の活躍	
現在（2019 年 12 月）： 豊かな暮らしを残すために環境問題を考える会の参加女性者数 全体 35 名（うち女性 21 名）	2022 年： 豊かな暮らしを残すために環境問題を考える会の参加女性者数 全体 45 名（うち女性 30 名）
ゴミの分別によるクリーンエネルギーの拡大などによる環境問題を考える会の参加女性者数を拡大する。	

(4) 多様なステークホルダーとの連携

団体・組織名等	モデル事業における位置付け・役割
与謝野町区長連絡協議会	与謝野町の環境改善の取組（住民参加のゴミ拾他） 財産区：森林所有
与謝野町農家組織代表者会議	環境保全型農業の推進 農業者への普及
よさのうみ福祉会 （リフレかやの里）	社会福祉法人 都市農村交流施設の指定管理者で あり農福連携の主体
加悦ファーマーズライス(株)	第三セクターであり、与謝野町産米の加工販売
京都祐喜(株)	農地適格法人 与謝野町産米の輸出
NPO丹後の自然を守る会	天ぶら油を原料とするバイオディーゼルの製造販売
よさの百年の暮らし委員会	豊かな暮らしを残すために環境問題を考える会
与謝野町スマートグリーンビジ レτζ確立協議会 構成員 三重大学 立命館大学 認定農業者会議 ソフトバンク(株) フューチャー(株) ほか 12 団体	産官学民連携の与謝野町のスマート農業推進協議 会 民間企業の情報通信技術を町内へ展開 協議会のマネジメント及び肥料効果測定 有機質肥料の効果に対する土壌診断 環境保全型農業の実践者 試験栽培担当 農業 IOT 機器による担い手育成 IOTの活用による地産地消の取組の推進
宮津地方森林組合	与謝野町内の森林整備
与謝野町商工会	地産地消の取組の推進
与謝野町観光協会	地産地消の取組の推進
阿蘇海環境づくり協働会議（京 都府丹後地域内の 14 団体）	京都府、宮津市、与謝野町の連携による阿蘇海の環 境改善の取組の推進。環境教育活動の実施
特定非営利活動法人国際ボラ ンティア学生協会	阿蘇海の異常繁殖した牡蠣の殻など回収
宮津与謝環境組合（宮津市、伊 根町、与謝野町）	流域のごみ処理施設の運営（生ごみなどを活用した バイオガス発電など）
福知山公立大学	連携協定による町全体の SDGs の推進支援

(5) 自律的好循環の具体化に向けた事業の実施

(事業スキーム)

「みえるまち」は、町が保有する潜在的資源(人・自然・産業・文化)の価値(安心安全・個性・もてなし)を「みえる化」させながら、自然循環社会を目指した持続可能な仕組みをつくりだすための戦略である。経済、社会、環境における様々な取組の根幹は安心安全で豊かな自然があってこそであり、ここを基点とすることがまさに本事業スキームである。



(将来的な自走に向けた取組)

住民、地元企業、学校、町を応援してくれる方など様々な方がそれぞれの立場で持続可能な社会の実現に向けて取組を進めてきて現在に至っている。

これらの方々と行政が一緒になって様々な地域の価値を認識し、創出する行動ことが最も重要であり、協創によるまちづくりにより持続可能な社会の構築を目指す。

(6) 資金スキーム

(総事業費)

3年間(2020～2022 年)総額:2,080,969 千円

(千円)

	経済面の取組	社会面の取組	環境面の取組	三側面をつな ぐ統合的取組	計
2020 年度	68,971	29,185	596,950	10,000	705,106
2021 年度	69,971	24,842	595,050	2,000	691,863
2022 年度	68,000	24,000	590,000	2,000	684,000
計	206,942	78,027	1,782,000	14,000	2,080,969

(活用予定の支援施策)

支援施策の名称	活用予定 年度	活用予定額 (千円)	活用予定の取組の概要
地方創生推進交付金(内閣 府)	2020	20,400	環境保全型農業の推進に係る部分につ いて活用予定。

(民間投資等)

資金については、公的負担をはじめ有利な補助事業の活用を検討している。また、金融期間との連携により、財源確保のアドバイスを含め検討する。

(7)スケジュール

	取組名	2020 年度	2021 年度	2022 年度
統合	与謝野町みえるまち計画策定	計画の策定 (～12月)		
	SDGs 普及の取組	シンポジウムの開催 (～2月)	シンポジウムの開催 (周年)	シンポジウムの開催 (周年)
	情報発信の取組	ホームページの構築 (～2月)	情報発信 (周年)	情報発信 (周年)
経済	①－1 与謝野町産米の地産他消 の推進			
	①－2 与謝野町産米の輸出拡大			
	①－3ホップなど新しい作物の栽培			
社会	②－1 障害者の雇用			
	②－2 女性の活躍			
	②－3 関係人口拡大等による移 住定住世帯			
環境	③－1 野田川の BOD 値の改善			
	③－2 自然エネルギーの拡大			

2020 年度 SDGs 未来都市全体計画提案概要 (提案様式2)

提案全体のタイトル: みえるまち ～地域資源の安心安全を活かした循環社会の構築～

提案者名: 京都府与謝野町

全体計画の概要:

当町でこれまで推進してきた自然循環農業を機軸に、野田川流域の農地・河川や天橋立・阿蘇海の環境保全、安心安全な地域で暮らす人々の誰もが活躍し、地域資源を活かした価値を創造することで、経済・環境・社会のそれぞれが連動した循環社会の構築を目指す。

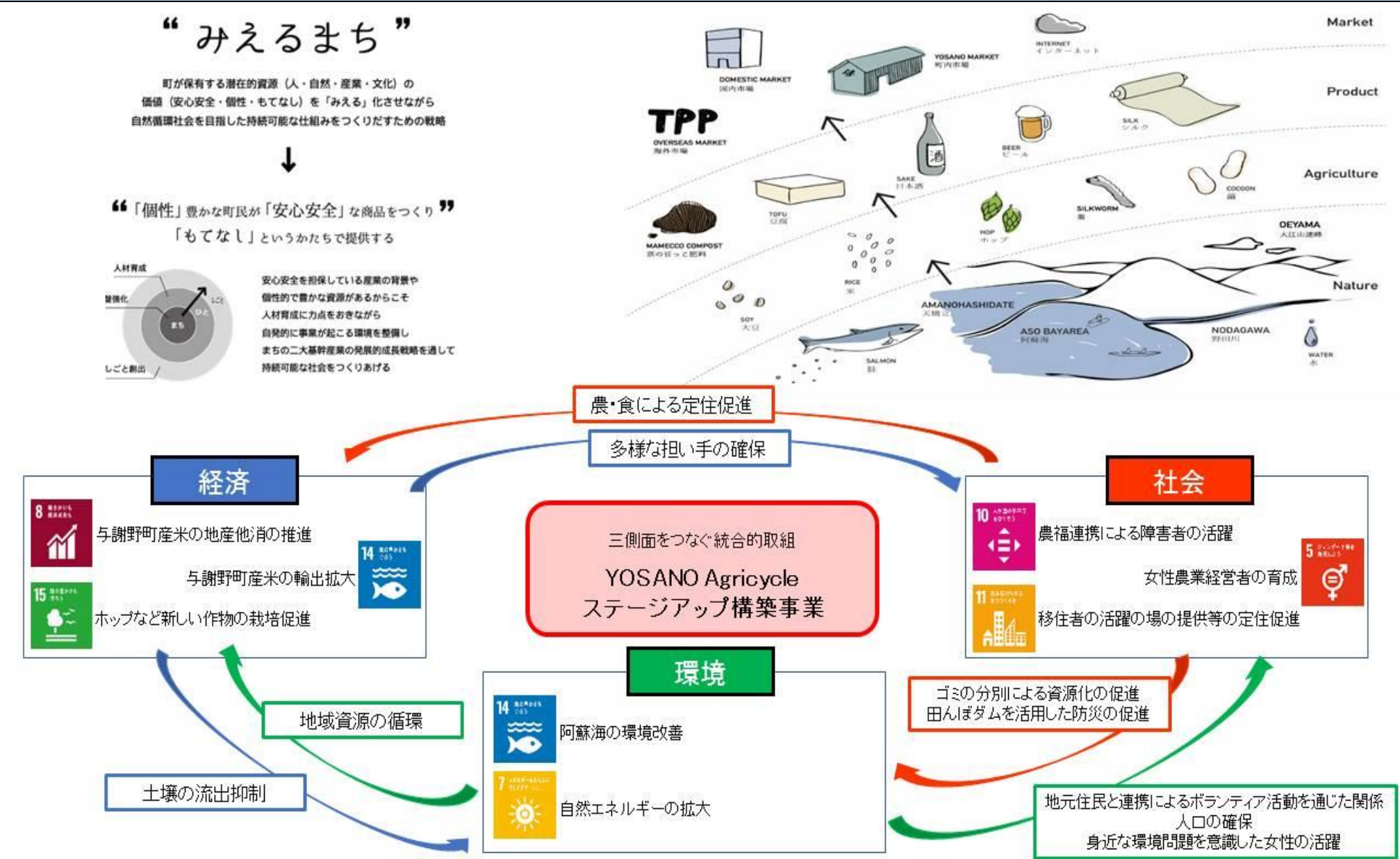
1. 未来ビジョン	地域の実態		2030 年のあるべき姿	
	大江山連峰をはじめとする分水嶺に囲まれ地理的にも閉鎖的な環境であることから、安心安全な自然環境を「価値」と認識し、天橋立・阿蘇海までの流域全体の環境保全の取組や自然循環農業を推進している。		大江山連峰から阿蘇海まで続く流域の豊かな自然環境を保全し、安心安全を背景に保有する潜在的資源(人・自然・産業・文化)の価値を活かしながら、新たな価値を創出する持続可能な循環型社会を創る。	
	2030 年のあるべき姿の実現に向けた優先的なゴール・ターゲット	(経済) 自然循環農業の推進を加速させ、高付加価値農産物の生産を促進する。担い手となる人材を育成し持続可能性を向上する。 (社会) 多様な価値を認め、障害者、高齢者、女性等、誰もが活躍でき、地域全体で協力しあう社会を構築する。 (環境) 流域全体の環境保全とゴミの排出抑制と再資源化を推進する。		
2. 推進に資する取組	自治体SDGsに資する取組		情報発信	普及展開性
	自然循環農業による農産物の栽培面積を拡大し生産量と流通量を増やす。また、阿蘇海の環境改善などの流域の環境をフィールドにした環境教育を実施するとともに、阿蘇海に異常繁殖する牡蠣の殻や京都府北部のカニ殻など現在では産業廃棄物である物を活用した肥料を開発し、自然循環社会の構築を推進する。		町広報誌、町ホームページ、与謝野町有線テレビを活用し広く町民へSDGsの取組を普及する。また、よさのみらい大学への参加を通じた実践、関係団体を通じた取組の共有に加え、国際交流団体や来町外国人への紹介を通じた普及も図る。	日本の中山間地域は、農業が産業の中心である地域が多く、環境に配慮した農業の取り組みが求められている。海から山まで環境に配慮した取り組みを農業者と地域住民と協働で実施することは全国の中山間地域に普及できる可能性は十分にある。
3. 推進体制	各種計画への反映		行政体内部の執行体制	ステークホルダーとの連携
	第2次与謝野町総合計画(基本構想 2018～2026、前期基本計画 2018～2022)をSDGsの推進計画に準ずるものと位置付け、第2期創生総合戦略(期間:2020～2024)においても、当町が取り組みを進めてきた活動をSDGsの取り組みに位置付ける。		本部長を町長とする与謝野町まちづくり及び行政改革推進本部を設置しており、当本部を与謝野町SDGsまちづくり推進本部としてSDGsを推進する。	本事業の取組は、町民と町民等で組織するまちづくり団体が主体となり実施していくことから、行政から町民やまちづくり団体に対して情報提供を行うことにより、一層の主体性の向上を図る。また、主体と行政の連携を密にし、町民と団体、団体と団体が連携することにより効果的な取組の推進を図る。
	自律的好循環の形成に向けた制度の構築等	与謝野町産の有機質肥料を使用している認証制度を15年前から実施している。持続可能な取り組みが世界中で展開されていることから、経済 環境 社会の三側面をつなぐ統合的取組を実践したことを認証する上位の基準を設け、認証制度をアップデートし、価値をマネタイズ(収益化)し価値の共感を図る。		

2020 年度自治体SDGsモデル事業提案概要(提案様式3)

自治体SDGsモデル事業名:みえるまち ～地域資源の安心安全を活かした循環社会の構築～

提案者名:京都府与謝野町

取組内容の概要： 当町でこれまで推進してきた自然循環農業を機軸に、野田川流域の農地・河川や天橋立・阿蘇海の環境保全、安心安全な地域で暮らす人々の誰もが活躍し、地域資源を活かした価値を創造することで、経済・環境・社会のそれぞれが連動した循環社会の構築を目指す。



2020年度SDGs未来都市等提案書 参考資料一覧表

No.	資料名	関係箇所
1	与謝野町自然循環農業	6ページ (3)2030年のあるべき姿の実現に向けた優先的なゴール、ターゲット (経済)
2	”おたぎやあさま”の取り組み～働く障害者が町を元気に～	7ページ (3)2030年のあるべき姿の実現に向けた優先的なゴール、ターゲット (社会)
3	阿蘇海環境づくり協働会議 平成 30 年度の取組 年	8ページ (3)2030年のあるべき姿の実現に向けた優先的なゴール、ターゲット (環境)
4	第2次与謝野町総合計画(抜粋)	12ページ (1)各種計画への反映
5	第2期与謝野町ひと・しごと・まち創生総合戦略(抜粋)	12ページ (1)各種計画への反映
6	かべ新聞「うちのまち」第9号 (よさのみらい大学地域づくり学部講座)	19ページ (統合的取組による全体最適化の概要及びその過程における工夫)

与謝野町産

京都 丹後

こしひかり

天橋立にやさしい自然循環農業で
誕生したお米です。



「与謝野町産こしひかり」は、
有機質肥料「京の豆っこ」を使って栽培
された丹後産コシヒカリです。
化学肥料や農薬をできるだけ減らし、
自然環境にやさしいお米となるように配
慮して栽培しています。

京都府の海と山のそばにある
小さな町の大きな取り組み。

与謝野町は 自然循環農業で 天橋立を守り育てたい。



与謝野町では、当町の下流にある阿蘇海・天橋立の環境を守るための取り組みを始めています。

農業分野では、自然循環農業により環境に与える負荷を少なくした農業を進め、化学肥料から有機質肥料に転換することや浅水代かきの実施、除草剤を使わない畦畔除草等により、野田川・阿蘇海の水質改善に努め、農業分野からも「天橋立」を応援しながら、環境に配慮した米づくりを進めています。

3つの努力目標を掲げています。

- ① 有機質肥料【京の豆っこ】を使用しましょう。
- ② 田んぼの濁り水を川に流さないようにしましょう。
- ③ 天橋立を守り育てる取組に参加しましょう。

大江山連峰

野

田

川

水田整地では濁り水防止や漏水を極力少なくするために少ない水で整地する【浅水代かき】という農法を行っています。

自然にやさしい循環農業は【京の豆っこ】の使用ならではの夢と希望に満ちた農法です。

川から海へ流れた水は空へ昇り雲になりやがて雨や雪となり再び大地へ還ります。



与謝野町・天橋立を守る会等が連携して阿蘇海近辺の環境浄化や環境学習に取り組んでいます。

阿蘇海

日本三景
天橋立

朝焼けの美しい天橋立。
与謝野町からの展望です。



宮津湾

発行：与謝野町 農林課

〒629-2498 京都府与謝郡与謝野町字加悦 433 番地
TEL 0772-43-2191 URL <http://www.town-yosano.jp/>



“おたぎやあさま”の取り組み ～働く障害者が町を元気に～

記事公開日：2018年09月05日

#障害者雇用・就労

#農福連携

シェアする ?



過疎と高齢化が進む京都府与野町。かつて丹後ちりめんで繁栄したこの町は、現在、社会福祉法人が運営する小さなリゾート施設に希望を託しています。そこにあったのは、障害のある人、地元農家、地域住民のすべてが元気になる「お互いさま」の仕組みです。

障害のある人に仕事を任せる施設の取り組み

低賃金からの脱却

地域の全員が幸せになれる「おたぎやあさま」の仕組み

障害のある人に仕事を任せる施設の取り組み

京都市北部の山間にある与野町は、人口2万人余りの小さな町。人口の減少が続く、高齢化率は34.4%です。

そんな町を見下ろす高台に、毎朝1人の男性がやってきます。ここで発声練習をするKさん（43）です。

「いらっしゃいませ。いらっしゃいませ。ありがとうございました。」



町にある唯一のリゾート施設「リフレかやの里」がKさんの職場です。ここは地元の社会福祉法人が運営し、障害のある人たちが働きながら一般就労に向けた訓練をしています。



吃音に悩むKさんは、7年前に皿洗いの仕事からスタート。今ではホールで接客の先頭に立つまでになっています。接客の仕事はKさんの希望でした。

「もともとちょっと吃音もあったんで。接客みたいなことには興味はあって、やってみたいとは思っていたんですけど。ちょっと僕には無理やなって思っていたんですけど。フロアじゃないときに仕事仲間としゃべっていたら、最近ようしゃべっているなど。それでも大丈夫やろうということで、フロアにしたんですけど。」(Kさん)

小さな町のたった1つのリゾート施設は、週末になるとたくさんのお客さんで賑わいます。Kさんも精一杯に力を尽くし、発声練習の成果を発揮して堂々とした仕事ぶりです。

この施設では、それぞれが自分の能力を生かして、風呂掃除や庭の手入れなど、さまざまな仕事を選べます。その一つが、農産物の加工所です。知的障害のある人たち6名が働いています。



作っているのは、地元の農家が育てたにんにくがたっぷり入った焼き肉のたれ。計量なども作業者が行います。どんなことでも、できるだけ自分たちでやるのがここの方針。そのほうが力とやる気を引き出せると考えています。

加工所がオープンして7年、生産量は増え続けて賃金は50%アップしました。施設の管理者を務める矢嶋広和さんも成果を強調します。

「職員任せじゃなしに、自分たちでしっかりと給料を稼ぐんだという意識を持ってもらった成果が今ここに表れていると思います。彼らには最終的には京都府の最低賃金(856円)を追い抜くくらいまで頑張っていこうということで。すごく必死になって、ついてきてもらってる格好なんです。」(矢嶋さん)

低賃金からの脱却

その昔、与謝野町は、他の絹織物にはないしなやかさのある丹後ちりめんの産地として繁栄を極めていました。

そんな好景気のなか、今のリゾート施設につながる1粒の種がまかれます。全国に先駆けて昭和45年に開校した、与謝の海養護学校です。障害のある人への差別が根強かった時代に、「学校づくりは地域づくりである」との理念を掲げ、障害のある子どもたちのための教育を始めました。



5年後には、卒業後の就職先として作業所を開設。丹後ちりめんの模様を作る道具の下準備を請け負います。しかし、作業所の資金は極めて低いものでした。

現在、リゾート施設の管理者を務める藤原さゆりさんは、34年前に大学を卒業してこの作業所に就職。そして、初めて給料をもらった日に受けたショックを今でも忘れないと語ります。

「最初、22歳で働いたときに、同じような年代の利用者さんたちが、新米の私にいろんな仕事を教えてくれるわけですね。1か月たったときに、彼や彼女らのお給料は1万円に満たない。私はその10倍くらいありました、手取りで。すごく矛盾を感じて。私のこのサラーの意味は、この人たちにきちんとお給料が払える仕事を提供することなんだなということで、自分を納得させたことを覚えている。」（藤原さん）



藤原さんたちスタッフは、町のためにできることを考えました。1人暮らしのお年寄りのための弁当を作り、担い手のいない田んぼや畑を耕します。そして、町のリゾート施設が倒産したとき、再建を託されたのが藤原さんたちでした。「この人たちなら、何があってもやりとげしてくれる」と、町の人から信頼されたのです。

藤原さんたちの仕事の場合は、野菜農家の収穫現場にもあります。普段は自分たちの畑で野菜を作っている農業班のメンバーですが、農家に頼まれれば手伝いに向かいます。資金は、一般的な作業所のおよそ2倍の時給300円。障害のある人にとっても、人手が足りない農家にとっても嬉しい仕事です。

今や町の人たちから大きな期待を集めるリゾート施設。働く人たちは、できる仕事を少しでも増やそうと毎日の仕事に取り組んでいます。

地域の全員が幸せになれる「おたぎやあさま」の仕組み

農産物加工所のサブリーダー細見真人さん（29）の強みは、単純な作業を粘り強くこなすことです。この日は、焦がさないように鍋を1時間かき混ぜ続けた焼き肉のたれを127本瓶詰めしました。最終チェックで、1本1本、大きなにんにくの塊などが残っていないか、目で見て確かめています。

阿蘇海環境づくり協働会議 平成30年度の取組

1 清掃活動等の実施（行政・地域団体等が協働実施）

- 夏の阿蘇海清掃（海藻類・漂着ゴミの回収） ※7月豪雨の影響を懸念し中止又は順延
地域住民が中心となって海岸漂着ゴミを除去

<与謝野町男山区：アオサ回収> ※中止

【実施予定日】 7月8日（日）

【予 定 場 所】 岩滝海岸

<宮津市府中地区：漂着ゴミ回収>

【実施日】 8月28日（火）（7月9日（月）から順延）

【場 所】 天橋海岸～大垣海岸

【参加者】 約51人（IVUSAとの共同実施）

【回収量】 約4.7 t

●秋の清掃活動

<阿蘇海清掃：宮津市府中区>

【実施日】 10月23日（火）

【場 所】 天橋海岸～大垣海岸

【参加者】 約30人

【回収量】 約6.8 t

●地元主体の清掃活動（与謝野町浜町区、東町区）

【実施日】 7月15日（日）

【場 所】 区内護岸及び歩道部漂着ごみ収集処分

【参加者】 約110人（浜町区、東町区他）

【収集量】 約15.5t

【実施日】 8月5日（日）

【場 所】 区内護岸部漂着ごみ収集処分

【参加者】 約59人（浜町区他）

【収集量】 約3.9t

●NP0国際ボランティア学生協会（IVUSA）と連携した阿蘇海清掃

大学生ボランティアを受け入れ、より大規模な清掃活動を実施。また、活動を通じて地元住民との交流を深め、新たな取組の場づくり・環づくりを推進

< 6月カキ殻活用試験 >

【実施日】 6月16日（土）

【内 容】 カキ殻の資源活用（京丹後ふるさと農園）

【参加者】 IVUSA：3名

< 7月子ども達への環境保護啓発事業 >

【実施日】 7月16日（祝）

【内 容】 川のゴミ拾い：300ゴミ袋2袋分
地域主催の子ども向け環境イベントへの協力

【参加者】 IVUSA：3名

後野区、地元小学生ほか：約30名

< 8月阿蘇海夏プロ > ※大学生83名参加

【実施日】 8月26日（日）～29日（水）

【内 容】 ○「カキ殻クリーン大作戦」の実施（2日間：延べ45名の参加）

・海洋高校17名（教員含む）をはじめ、企業、環境団体等からも参加あり

○府中区での海岸漂着ゴミの回収（地元参加者：19名） ※再掲

○子ども向け環境学習会の実施（2日間：延べ4名）

・阿蘇海の環境に関する工作、カキ殻回収の見学等（対象：小学校3、4年生）

・船上環境学習会（対象：中学生）

○大学生ボランティアと地域住民の交流会の実施（地元参加者：47名）

【回収量】 カキ殻回収量：約16.0t

漂着ゴミ回収量：約5.8t

< 10月野田川清掃 >

【実施日】 10月20日（土）、21日（日）

【内 容】 川のゴミ拾い：約1.1t（枝木を含む）

【参加者】 IVUSA：5名

後野区：2日間延べ16名

< 2月・3月阿蘇海春プロ > ※大学生103人参加

【実施日】 2月28日（木）～3月3日（日）

【内 容】 ○「阿蘇海環境づくり活動みんなでカキ殻拾うDay」の実施（39名の一般参加）

・活動実施に向けた実行委員会の立ち上げ（IVUSA、協働会議、地域4団体）

・作業終了後に参加者と大学生の交流を深めるための昼食会を実施

○カキ殻資源活用についての展示会の実施（天橋立駅構内等）

○子ども向け環境学習会の実施（参加者：子ども10名、保護者等7名）

・阿蘇海の環境に関する工作、カキ殻回収の見学等（対象：小学校3～6年生）

○イベント等での普及啓発

・「与謝野町の環境未来2019」でのIVUSAブース出店

・活動報告会の実施

○大学生ボランティアと地域住民の交流会の実施（地元参加者：約10名）

【回収量】 約51t（カキ殻）

大学生延べ197名参加。カキ殻約67トン回収

2 啓発活動の推進

●「阿蘇海の日」事業（市町主催事業）

7月14日を「阿蘇海の日」として事業を実施

①阿蘇海周遊体験学習会

- 日時：7月14日（土）8:00～12:30
- 場所：阿蘇海（阿蘇シーサイドパーク周辺）
- 参加者：約70人
- 内容：阿蘇海に親しみ、環境について学ぶ学習会

②事例発表・講演会・展示

- 日時：7月14日（日）13:30～16:00
- 場所：知遊館
- 参加者：約280人
- 内容：事例発表、講演会、展示コーナー

●環境ポスター掲示による啓発活動（市、町）

地域の小学生を対象に環境改善絵画コンクール実施。

入賞作品をパネルやポスターにして、地域内で掲出するなど意識啓発も実施

- 応募数 宮津市：6小学校62点
与謝野町：8小学校154点

3 環境学習の推進

●環境学習のサポート（NPO、府）

NPOや行政職員による小中学校及び企業の環境学習サポート。

阿蘇海流域の環境、野田川のサケ、生き物調査等

- 5月24日（木）与謝野町立桑飼小学校4年生（NPO）
- 5月30日（水）宮津市立府中小学校5年生（海洋高校）
- 6月5日（火）与謝野町宮津市中学校組合立橋立中学校1年生（NPO）
- 6月20日（水）与謝野町立山田小学校4・5年生（海上保安庁） ※参考
- 6月27日（水）与謝野町立岩滝小学校4年生（海上保安庁） ※参考
- 7月2日（月）与謝野町宮津市中学校組合立橋立中学校1年生（NPO）
- 7月2日（月）安田建設グループ安全衛生協力会（振興局）
- 7月11日（水）与謝野町立石川小学校5年生（海洋高校）
- 7月13日（金）与謝野町立与謝小学校4年生（海洋高校）
- 7月18日（水）宮津市立府中小学校4年生（振興局）
- 11月7日（水）与謝野町立三河内小学校5年生（与謝野町） ※参考
- 12月13日（木）与謝野町立三河内小学校5年生（保健所）
- 3月6日（水）与謝野町立山田小学校4年生（NPO）
- 3月7日（木）与謝野町立岩滝小学校4年生（与謝野町） ※参考

●アマモ場造成研究（海洋高校）

- 5月10日（木）阿蘇海アマモ場、宮津湾アマモ場調査
- 6月7日（木）阿蘇海アマモ場調査、宮津湾アマモ生殖株採取
- 11月28日（水）阿蘇海試験区でのアマモ播種試験（約8万粒）

4 農業者関係の取組

●自然循環農業（京の豆っこ肥料）の推進（町）

豆腐工場からでたおからを作った「京の豆っこ肥料」を推進し、化学肥料から有機質肥料にすることで、与謝野町ブランドを確立するとともに、阿蘇海等環境に優しい農業の促進を図る。

5 水産事業者の取組

●「天橋立育成あさり」の育成・販売（漁業者）

平成24年度までに開発した育成技術により、身入りが大きく栄養分の豊富なアサリを育成。阿蘇海の水質浄化にも貢献

●「文珠産天然生かき」の出荷（漁業者）

阿蘇海の豊富な栄養に育まれた天然カキは、はち切れんばかりに身入りが良く高品質。新たな特産品開発だけでなく、観光振興、景観保全等一石三鳥の取組を目指す。

6 地域の主体的な活動

●サケのふるさとプロジェクト（後野区、NPO）

野田川に遡上するサケの見守り活動を通じて、周囲の環境保全や、暮らしと自然との関わり方を考える。

●ちょこボラステーション（NPO、市、町）

いつでも誰でも気軽に「ちょこっとボランティア」できるようステーションを阿蘇海周辺6カ所に設置。市町指定ゴミ袋の配布、回収ゴミの一時預かりを開始。回収ゴミの処分場への運搬は市町が行う。

- 吉野茶屋（文珠）
- 一ノ宮汽船乗り場（府中）
- 阿蘇シーサイドパーク（岩滝）
- クアハウス岩滝
- 与謝野町役場野田川庁舎
- 与謝野町役場加悦庁舎

●天ぷら油の回収（NPO、市、町）

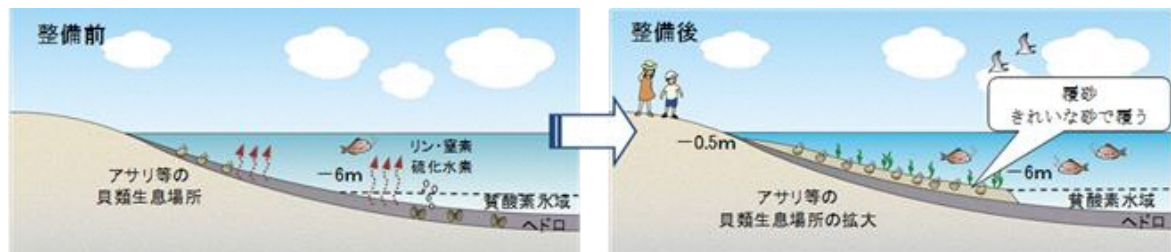
流入負荷削減の取組として実施。市町庁舎のほか、公民館、観光施設、保育所にも回収ボックスを設置

7 行政による取組

●阿蘇海シーブルー事業（港湾局港湾施設課）

平成29年度までに約19haの覆砂工を実施。平成30年度は効果検証を実施。

○事業期間：H 5～30／全体計画：19 ha



●下水道事業、浄化槽設置補助（市、町）

●市町村森林整備計画の策定と適切な森林整備の実行監理（市、町）

～学生とカキ殻を拾って楽しく阿蘇海をキレイに！～

みんなでカキ殻拾うDay in 天橋立・阿蘇シーサイドパーク

阿蘇海では、海底に溜まったヘドロからリンなどが溶け出し「富栄養化」が起きています。これにより、カキ殻が堆積しアサリなどの漁獲量減少や景観悪化等の深刻な問題を引き起こしています。皆さんも、大学生と一緒にカキ殻を拾って阿蘇海の問題改善に努めませんか♪

3月1日(日) 9:00集合

場所：天橋立・阿蘇シーサイドパーク（宮津市・与謝野町同時開催）
参加費：無料（詳細は裏面へ→☒）

昼食会も開催します！

みんなでカキ殻拾うDay終了後、開催
参加費：300円



全国から集まった大学生とも
交流できます！



カキ殻を回収するだけでなく生きている牡蠣
との選別作業など、体力に自信のない方も、
安心してご参加いただけます！



同日開催します！！

子ども向け環境学習会

●紙芝居とカキ殻を使った工作で
阿蘇海マスターになろう！

（天候が良ければ、屋外散策も実施します）

新企画！

小山住建さん×IVUSA コラボ企画

●カキ殻を使った漆喰で小物づくり！



第 2 次与謝野町総合計画（抜粋）



第2章 基本構想 ～与謝野町の未来像～

1. 与謝野町が目指す未来像

人・自然・伝統 与謝野で織りなす 新たな未来

わたしたち住民の宝。

それは豊かな自然と歴史によって育まれた伝統と文化、そして何よりもそれらを誇りに思い現代に残してきた住民一人ひとりです。

そして、与謝野町に縁のある人、与謝野町に関心のある人に支えられながら、知恵と技術、努力によってこれらの宝を守り、活かし、そして磨いてきました。

人口減少、少子高齢化といったこれまで日本が経験したことのない社会環境の変化が続く時代においても、先人のたゆまぬ努力によって 300 年という歴史を刻んできた丹後ちりめんのように、時代とともに変化する社会に対応しながら、いつまでもキラリと輝き元気あふれる住みよいまちであってほしいと願います。

そのためには、わたしたち住民が、まちの未来を描き、その未来を実現するために行動することが大切です。

「水・緑・空 笑顔かがやく ふれあいのまち」

わたしたちは、美しい水と緑、澄んだ空に代表される「自然」との調和を大切にしながら、一人ひとりの笑顔かがやく、ふれあい豊かなまちを目指してきましたが、これからはこれを継承し、かつ新たにわたしたち住民の宝である「伝統」と「人」を加え「人・自然・伝統 与謝野で織りなす新たな未来」を与謝野町が目指す未来像として掲げます。

これには、^{たて}経糸と^{よこ}緯糸が交わって風合い豊かな丹後ちりめんが織りなされていくように、自然と伝統が交わりながら、まちの主人公であるわたしたち住民一人ひとりが「人財」となり与謝野町の新たな未来を創る、という意味が込められています。

2. まちづくりの基本理念 3つの「み」

わたしたちは、与謝野町の未来像を実現するためのまちづくりの理念として、次の3つの「み」を掲げます。

みんな

幸せを願い、豊かさを求め、より良い暮らしを望み、子どもたち、孫たち、そしてまだ見ぬ未来の世代につなきたいという想いがまちづくりの原動力になります。与謝野町に暮らす「みんな」の手でまちづくりを進めていきます（共創）。

みらい

自分自身の描いた未来を一つひとつ実現していくことは、未来に向かう一人ひとりの営みでもあり、未来のまちを形づくることでもあります。今を生きるわたしたちが未来を創造し、将来世代のためにも未来志向のまちづくりを進めていきます。

みえる

まちづくりの主人公であるわたしたち住民が描いたまちをそれぞれの立場で、またお互いに協力しながら実現していくために、ヒト・モノ・カネ・情報などのまちの資源や動きをみえる化し、まちを創造することが大切となります。そんな「みんな」にとっての「みえる」まちづくりを進めていきます。

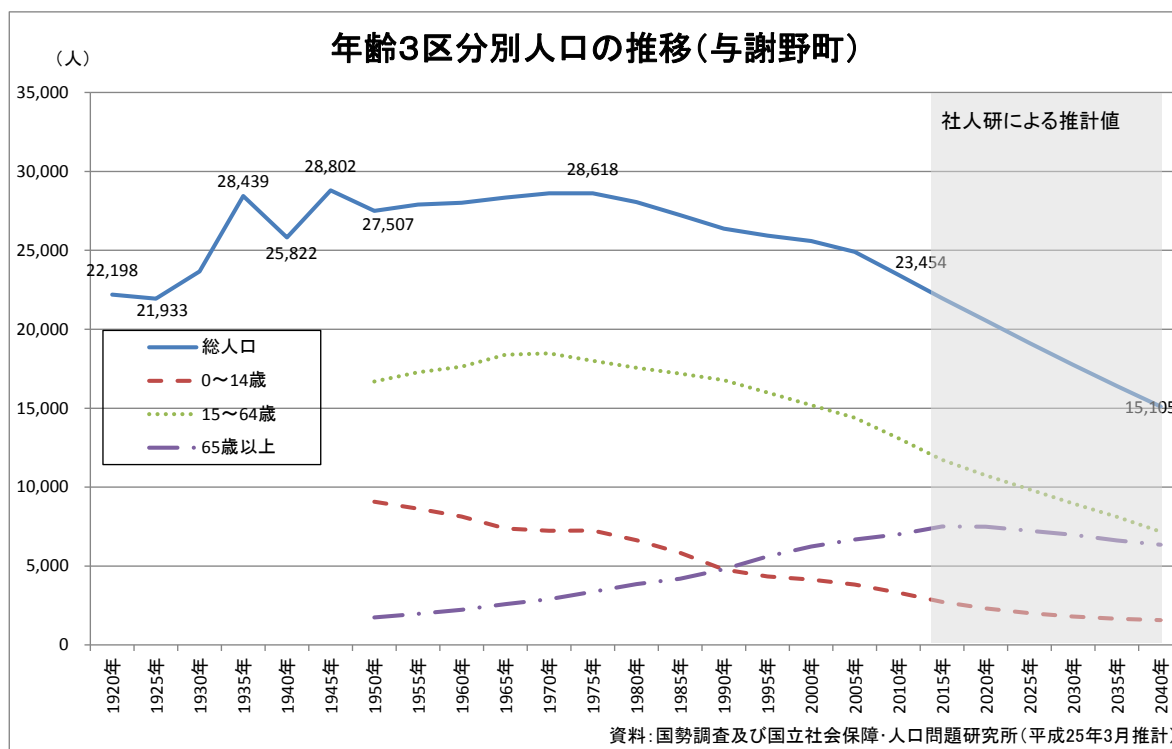
3. 人口の見通し

与謝野町の人口は、第2次世界大戦後から第2次ベビーブーム（昭和46年（1971年）～昭和49年（1974年））が終わるまで人口が微増で推移し、その後、人口減少が始まりました。人口減少の要因は、死亡者数が出生者数を上回る自然減と、転出者数が転入者数を上回る社会減によるもので、出生数については合計特殊出生率（ベイズ推定値）の低下に加え、生涯未婚率の上昇が背景にあります。また、転出については大学・短大などへの進学や就職に伴う若年層の転出が多いことが背景となっています。

年齢3区分別人口では、年少人口（0～14 歳）と生産年齢人口（15～64 歳）ともに減少が続く一方で、高齢者人口（65 歳以上）は増加を続けて来ましたが、平成 27 年（2015 年）をピークに減少に転じ、今後も減少が続くと考えられます。

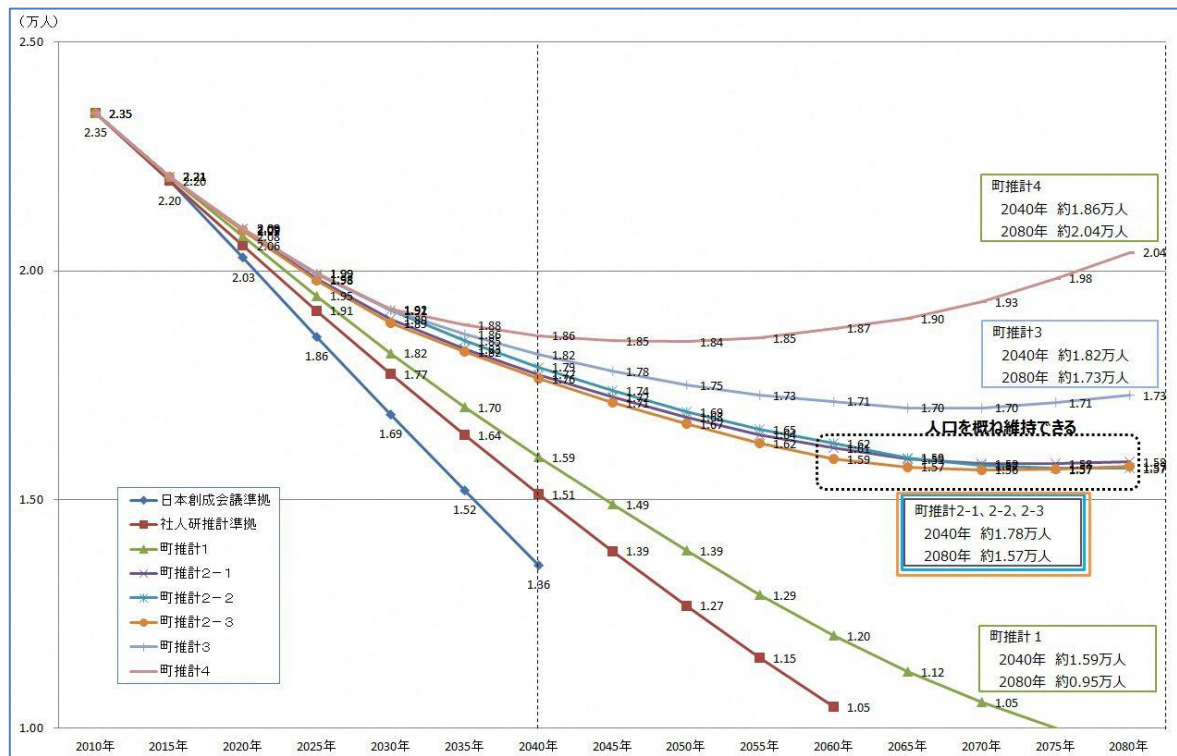
今、日本は世界が経験したことのないスピードで人口減少が進行しています。急激な人口減少は社会のいたるところにひずみを生み、様々な問題を引き起こします。

社人研による本町の人口推計（平成 25 年 3 月推計）を見ると、平成 37 年（2025 年）には 2 万人を切り、平成 52 年（2040 年）には 15,000 人程度になると予測されていますが、人口減少下においても持続可能なまちをつくるため、合計特殊出生率や社会増減がある程度改善したシナリオで推計した結果をもとに、平成 72 年（2060 年）以降に「16,000 人」前後で人口が落ち着く「おおむね維持」を本町の長期的目標として掲げます。



出典：平成 27 年 12 月京都与謝野人口ビジョン

与謝野町の人口の将来推計



4. 未来を実現するための分野別方針

与謝野町の未来像を実現するために、基本的な考えや方針を示します。

(1) 一人ひとりが個性を活かし安心して働けるまち

「もっと働く場の確保を！」

これがわたしたち住民の願いです。

「安心できる暮らしのためにも仕事をして収入を得る」「安定した収入を得られる仕事があれば、自然と人は集まってくる」「人が集まり、知恵を出し合い、ときには切磋琢磨しあえば、地域経済は活性化し、地域は元気になる」「元気な地域からはチャレンジを生み出すエネルギーが生まれ、それがまた新たな働く場を生む」

そんな好循環をあらゆる産業分野に生み出したい。

地域の暮らしを支えてきた織物業や安心安全で豊かな食を支えてきた農業をはじめとするこのまちの産業は、先人たちの挑戦によって現代まで受け継がれてきました。そして今、若き担い手たちは、先人たちが培ってきた知恵と技に最先端の技術を融合するなど、新たな挑戦をはじめています。

また、労働力人口の減少と担い手の高齢化が進む中、急激に進化する人工知能の登場により、働く環境は大きく変化することが予想されています。だからこそ、わたしたちは「変化すること」「挑戦すること」「応援すること」が大切だと考えています。

時代に合わせて「変化すること」、みんなが培ってきた知恵・技・資源を最大限に活用し、互いに共創しながら変化に「挑戦すること」、そして、それをまちのみんなで「応援すること」で人財を育み、「一人ひとりが個性を活かし安心して働けるまち」を目指します。

(2) 地元を誇りに想い、人の流れを生むまち

四季折々の表情を見せる「大江山連峰」、黄金の稲穂が輝く「加悦谷平野」、鮭が遡上する「野田川」、日本三景を形成する「阿蘇海」などの豊かな自然、300年を超える歴史のある「丹後ちりめん」、ツヤツヤと輝く美味しい「お米」、そしてそれらを生み出す「人」。

このまちで暮らすわたしたちが与謝野町ならではの魅力を認識し、地域を愛し、誇りに想うことが「訪れたい」「住んでみたい」まちとして、「人の流れ」を生み出します。また与謝野町を離れた人も故郷を想うことにつながります。

人の流れは来訪者と住民との交流を増やし、「ようきになったなあ※」というおもてなしに、きっと訪れた人も嬉しく、楽しくなります。そして両親やおじいちゃん、おばあちゃんが与謝野町生まれである、与謝野町のお米を食べている、着物に興味がある、訪れたことがある、泊まったことがある、遊んだことがある。そんな人たちとの「つながりの輪」が広がります。

このような与謝野町に関心を持ち、与謝野町の人と関係を持つ「よさの者※」を世界中に多く生み出すために、そして移住者やUターン者が増え、若者が中心となりまちが賑やかで活気で溢れるよう「地元を誇りに想い、人の流れを生むまち」を目指します。

※ ようきになったなあ：京都府北部丹後地方の方言で「よく来てくれましたね」という意味。

※ よさの者：世の中を変えていくのは「若者、バカ者、よそ者」と言われる論にのって、町内に居住していなくても与謝野町に関心を持ち、与謝野町の人と関係を持っている人を意味する本計画上の造語。

(3) みんなが自分らしく幸せに生きるまち

健康に長生きしたいという願望はいつの時代もわたしたちのライフスタイルの中心になるものですが、他にも「このまちで暮らしながら、自分らしく一生を終えたい」「地域で助け合い、絆を深めたい」と多くの人が望んでいます。

自分の思い描くように、自分らしく生きるためには、まずは「一人ひとりの心と体の健康」が大切です。

また、少子高齢化の進行、核家族や単身世帯の増加、価値観の変化に伴い、昔に比べて人や地域とのつながりが少なくなり、将来への不安が高まり、人が抱えるストレスや課題も多様化していることから、「地域の力を活かした心のよりどころ（人や居場所）」が大切になってきます。

心と体が健康であれば、個人の生活の質を維持・向上できるだけでなく、人を思いやる余裕がもて、多様性を受け入れること・人とつながること・誰かを助けることもでき、まちの元気にもつながります。

このように、まずは一人ひとりが心身ともに健康になり、地域とつながることで、「みんなが自分らしく幸せに生きるまち」を目指します。

(4) つながりで笑顔を未来につむぐまち

澄んだ空気、たくさんの生き物が暮らす川や田んぼ、四季を彩る山々があり、子どもたちが自然や生き物との触れ合いを通して、様々な感情を味わいながらのびのびと育つ環境が与謝野町にはあります。そして、気持ちのいいあいさつが行き交い、子どもたちを見守る温かい人たちがいます。そのような環境で育った子どもたちの笑顔は、まちの宝です。

わたしたちの強い想い。それは、あふれる笑顔を家族や地域、さらにはまち全体に広げ、子どもたち、そして未来の世代へとつないでいくことです。

まちの宝である子どもたちを大切に育て、笑顔をつないでいくために、世代を超えたつながりを大切にし、家族・地域・社会・行政が手を携え、互いに頼ること、頼られることのできる関係を築くとともに、安心して結婚・出産・子育てできる環境、子どもたちが心も体も健やかに成長できる環境の構築を目指します。まずは、あいさつなど自分にできることから始めましょう。

将来、みんなに愛されながら育った子どもたちが、このまちで結婚・出産・子育てをして未来の世代へ笑顔をつないでいきたいと思える「つながりで笑顔を未来につむぐまち」を目指します。

(5) 魅力ある教育が活力ある人や地域を創るまち

与謝野町には、モノづくりと人づくりの歴史によって育まれた地域を愛し、地域に貢献するという精神が息づいています。その先人の魂は、今を生きるわたしたち一人ひとりの心の中にも育まれており、困難な課題に立ち向かい、挑戦する人々をつくってきました。そんな人々の背中を見ることができ恵まれた環境があります。

今も昔も、まちづくりの原点は人づくりです。

わたしたちは、先人の意志を引き継ぎ、一人ひとりの人権を尊重し、多様な個性に光をあててきた学校教育を、より地域に開かれたものにしていきます。また、青少年の健全な育成、生涯学習と生涯スポーツの充実、国際交流の積極展開と、誇りある歴史や文化の継承を通じて、人間的な感性や慈しみの精神、主体的に課題を解決し未来を拓くことができる人財に必要な基礎を培う、魅力ある教育を推進していきます。

そして、将来、自ら学び続ける力と故郷を想い続ける心を併せ持ち、「学んだことを社会に活かす」「仕事がないなら創りだす」という意欲溢れる人財や、活躍の場が世界のどこであったとしても、故郷への想いによって、いつまでも与謝野町とのつながりを大切にできる人財を育成し、「魅力ある教育が活力ある人や地域を創るまち」を目指します。

(6) 美しくて住みやすい安心安全なまち

大江山連峰から野田川を経て阿蘇海へと続く美しく豊かな自然、そこを流れる清らかな水やこの地の気候は、普段わたしたちが当たり前のように送っている生活や産業の基盤となるものであり、また与謝野町ならではの風景を作りだしています。

これら与謝野町ならではの美しい自然環境や風景・景観を残し、このまちに住む誰もが愛着を持つことが重要です。また、地域の交流が盛んで、みんなで助け合うことができ、誰にとっても住みやすい活力あるまちであり続けるとともに、道路、水道などのインフラや手つかずの空き家などが有効に活用され、効率的で持続可能なまちであることが求められています。

さらに、近年増加している自然災害への対応や犯罪被害への対応など安心安全なまちであることが求められています。

わたしたちは、地域のつながりを基本に、知恵とさらなる挑戦によってまちの魅力を高め、「美しくて住みやすい安心安全なまち」を目指します。

(7) 住民が主人公となるまち

このまちに暮らすわたしたちにとって、実り豊かで美しい自然と、先人から受け継がれてきた伝統は後世に残していきたい宝です。それら一つひとつを育み、伝えてきた一人ひとりも大切な宝です。幸せや豊かさ、より良い暮らしを望む想いと、多くの宝に恵まれた故郷への誇りは、まちづくりの原動力となります。

今後ますます進む人口減少や少子高齢化は、人と人とのつながりの希薄化、地域を支える人財の不足、提供できる公共サービスの縮小などをもたらす、結果、多くの宝が失われることが懸念されます。

そんな社会にあっても、多くの宝を後世に残し誰もが安心して暮らせるまちであるために、世代や地域を超えた人とのつながりを持ち、イキイキと輝くことが重要となります。そして、わたしたち一人ひとりが当事者意識と豊かな創造力、郷土愛を持ち合わせ、自らの地域は自ら治める地域力の高いまちを創り上げていくことが大切です。

まちの主人公はわたしたち住民です。個人と個人が共感し合い、地域と地域がつながり、住民と行政が力を合わせるなど、多様な主体が連携・協力し、「住民が主人公となるまち」を目指します。

第2期与謝野町ひと・しごと・まち創生総合戦略

“The promise for our future”

未来への約束

～京都与謝野のひとづくり、しごとづくり、まちづくり～



令和2年3月
与謝野町

<はじめに>

■ 人口減少・少子高齢化

わが国における人口は、2008 年をピークに減少し始めており、また総人口に占める高齢者人口の割合（高齢化率）は 2018 年時点で 28.1%と過去最高を記録、年間出生数の減少も続いているなど、人口減少・少子高齢化が進行しています。

与謝野町では、2015 年国勢調査人口 21,834 人、高齢化率 34.4%で、2010 年国勢調査から比べると、人口は 1,620 人の減、高齢化率は 4.5 ポイントの増となっています。戦後第 2 次ベビーブーム（1971～1975 年）期をピークに減少に転じて以降、1990 年には年少人口（0～14 歳）が老年人口（65 歳以上）を下回るなど、人口減少・少子高齢化傾向が続きます。

人口減少の原因は、出生数より死亡数が多いこと（自然減）と、転入数より転出数が多いこと（社会減）の二つです。本町では、この二つの原因により、近年は毎年約 300 人の人口が減少する傾向となっている実態があります。若年層が少なく年齢の大きい年代に偏る人口構造となっている現状において、出生率が上がり子どもの数が増えてもそれ以上に死亡数が多いこと、さらに進学や就職等によると考えられる若者の人口流出は止まらず、転出傾向が続いている現状においては、自然減と社会減の解消は難しいと言えます。

そのような状況下における本町の地域経済は、基幹産業の一つである織物業については、1973 年をピークに生産量・織物事業者数は減少の一途をたどり、また、農業についても農業者の高齢化と担い手不足が深刻な状況となっています。

■ 人口減少にどのように対応してきたか 第 1 期の総合戦略をふりかえって

与謝野町においては、人口減少を出来る限り抑制し 2060 年以降に「16,000 人」前後で人口が落ち着く「おおむね人口維持」を長期的目標として掲げながら、人口減少問題の克服のために「与謝野町ひと・しごと・まち創生総合戦略¹」を策定しました。

「織りなす人をつくる」

「創造的にものをつくる、しごとをつくる」

「まちへの人の流れをつくる」

「地域と地域が連携し持続可能なまち²をつくる」

を 4 つの基本目標とし、この町でイキイキと働き・共に学び育ち、そしてワクワクするような活動が行われ、キラリと光る人や地域資源がある。そして、その魅力に人が集まる。縮小する社会にあっても、ここに住む人やこの地域が輝き「老若男女がイキイキする与謝野(まち)」であり続けることを目指して取り組んできました。様々な取り組みによりその成果の芽が出つつありますが、人口減少問題の克服に向けては長期的

¹ 与謝野町ひと・しごと・まち創生総合戦略：平成 27 年 12 月策定。戦略の実施期間は平成 27 年度から平成 31 年度までの 5 年間。

² 持続可能なまち：地球環境や自然環境が適切に保全され、将来の世代が必要とするものを損なうことなく、現在の世代の要求を満たすようなまちづくりが行われている社会。

＜第 2 期与謝野町ひと・しごと・まち創生総合戦略について＞

第 2 期においては、関係人口³の創出や、AI⁴・IoT⁵などの未来技術の活用、SDGs⁶の理念にも沿った「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のあるやさしい社会、様々な主体による協働社会・共助社会づくりといった視点をより重視し、第 1 期に引き続き、本町の人口ビジョンで掲げている「2060 年以降に 16,000 人前後で落ちつくおおむね人口維持」を目標に、縮小する社会にあっても、ここに住む人やこの地域が輝き「老若男女がイキイキする与謝野(まち)」づくりを推進していきます。

■ 基本的な考え方

本町では、次の基本的な考え方によりこの総合戦略の取り組みを進めます。

- (1) 常識にとらわれず、チャレンジする姿勢を大事にします
- (2) 多様な価値観を尊重します
- (3) 民間の力を最大限発揮します
- (4) 持続可能な開発目標 (SDGs) を原動力とした地方創生を推進します



「持続可能な開発目標 (SDGs)」は、2015 年 9 月に国連で採択された「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030 年を年限とする 17 の国際目標。「みんなのための・みんなで支える」目標として、与謝野町では何ができるかを考え、あらゆる施策において SDGs の理念を踏まえ、取り組んでいきます。

³ 関係人口：移住した「定住人口」でもなく、観光にきた「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々のこと。

⁴ AI：人工知能。言語の理解や推論、問題解決などの知的行動を人間に代わってコンピューターに行わせる技術。

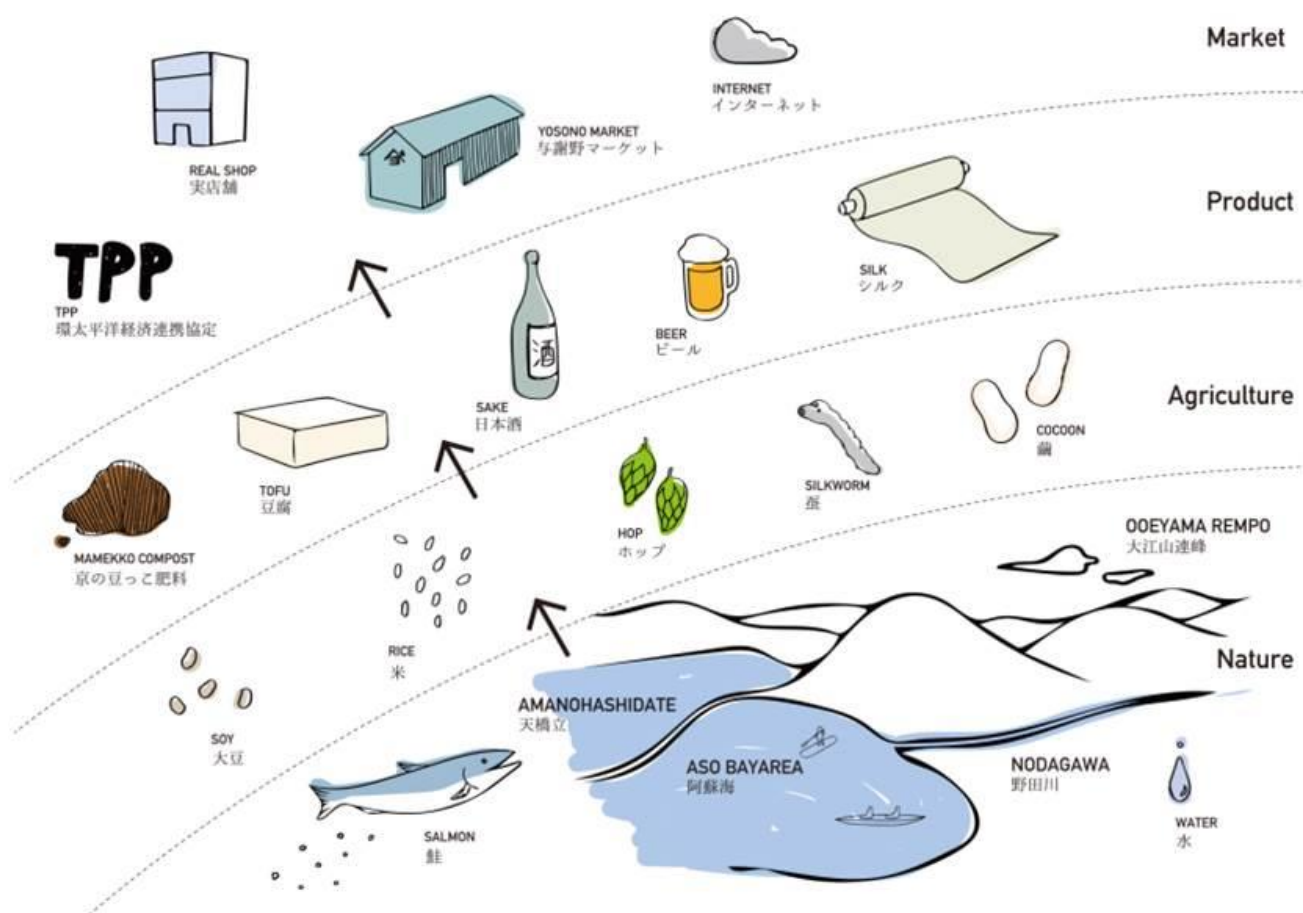
⁵ IoT：モノのインターネット。様々な「モノ（物）」がインターネットに接続され、情報交換することにより相互に制御する仕組み。

⁶ SDGs：持続可能な開発目標。2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標で、17 のゴールと 169 のターゲットから構成されている。

■与謝野町の持続可能な循環型社会

与謝野町の産業を育み、暮らしを支えているのは、大江山連峰から野田川、阿蘇海へとつながる肥沃で豊かな自然環境です。

まちや地域に対する愛情（よさの愛）を持った「ひとづくり」に力を入れながら、この豊かな自然環境を守り、そして、安心安全で恵まれた地域資源を活かし、自発的な挑戦と連携によるさまざまな価値が創出される環境を整え、よさの愛にあふれたキラリと光る人財による基幹産業の農業、織物業を中心とした「しごとづくり」と、限りある地域の資源（ヒト・モノ・カネ）をできるだけ地域の中で最大限に活用する「まちづくり」 — 持続可能な循環型社会⁷ — を創り上げ、次の世代にまちをつないでいきます。



⁷ 循環型社会：限りある資源を効率的に利用するとともに、再生産を行って、持続可能な形で循環させながら利用していく社会。

■ 5つの基本目標

本町では高校卒業後の若年層の転出超過が人口減少の最大の原因となっています。若者が町内へ帰ってくる、あるいは訪れる仕組みづくりが重要な視点であることを踏まえ、第1期に引き続き、まちや地域に対する愛情（よさの愛）を持った「ひとづくり」を最重要目標とし、よさの愛にあふれたキラリと光る人財による「しごとづくり」「まちづくり」を推進していくため、5つの基本目標を柱に第2期与謝野町ひと・しごと・まち創生総合戦略をまとめました。

基本目標 1	与謝野を愛し、多様性を認め合いながら、新しいモノやコトを創出する地域人財をつくる ～よさの愛あふれる“よさの ^{ひと} 人”の育成、活躍。そして、チャレンジを応援～
基本目標 2	たすけあう地域ぐるみの出産・子育てを実現 ～子育てするならこのまちで～
基本目標 3	持続可能な与謝野の産業をつくる ～与謝野町中小企業振興基本条例を核とした地域企業の育成～
基本目標 4	まちへの人の流れをつくる ～人と仕事の魅力で、交わる、関わる、集うまち～
基本目標 5	地域と地域が連携し、持続可能なまちをつくる ～新しい時代の流れを力に、つながり助け合って、安心・元気な暮らしを実現～

■ 総合戦略の名称について

名称については、一人でも多くの町民に分かりやすく伝え、「自分たちが主役である」と捉えてもらいたいという思いを込め、現在の与謝野町、与謝野町民だけでなく、未来の与謝野町、与謝野町民への約束であるという第1期の思いを引き継ぎ、「未来への約束 “The promise for our future” ～京都与謝野のひとづくり、しごとづくり、まちづくり～」としました。

■ 戦略の実施期間 令和2年度から令和6年度までの5年間

■ 効果の検証

基本目標それぞれに実現すべき成果に係る指標を設定するとともに、具体的な施策についても効果を客観的に検証できる指標（重要業績評価指標（KPI）⁸）を設定しました。これらの指標により総合戦略の進捗を毎年度確認、またその効果・成果を評価・検証し、必要に応じて総合戦略を見直すこととします。

⁸ 重要業績評価指標（KPI）：組織の目標達成度を評価するための最も重要な指標。

■ 第2期与謝野町ひと・しごと・まち創生総合戦略_体系

まちや地域に対する愛情（よさの愛）



基本目標 1 与謝野を愛し、多様性を認め合いながら、新しいモノやコトを創出する地域人財をつくる

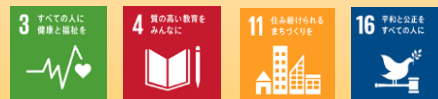
～よさの愛あふれる“よさの人”の育成、活躍。そして、チャレンジを応援～

(ア) 地域で育む地域人財の育成 (イ) チャレンジできる担い手育成 (ウ) 共感でつながる人の輪づくり



基本目標 2 たすけあう地域ぐるみの出産・子育てを実現 ～子育てするならこのまちで～

(ア) 切れ目のない妊娠・出産・子育て支援 (イ) 保育サービスの充実 (ウ) 地域における子育て支援
(エ) 子育て家庭にやさしい環境の整備



基本目標 3 持続可能な与謝野の産業をつくる

～与謝野町中小企業振興基本条例を核とした地域企業の育成～

(ア) 地域企業の継続的な生産・経営基盤の確立 (イ) 産業人財の確保・育成 (ウ) 地域経済循環の確立
(エ) 地域資源の情報発信と関係人口の拡大 (オ) 持続的経済を目指す調査研究



基本目標 4 まちへの人の流れをつくる ～人と仕事の魅力で、交わる、関わる、集うまち～

(ア) まちなかの魅力発見、掘起し、そして共感 (イ) よさの暮らしをイメージする体験型交流の推進
(ウ) 移住定住支援の強化



基本目標 5 地域と地域が連携し、持続可能なまちをつくる

～新しい時代の流れを力に、つながり助け合って、
安心・元気な暮らしを実現～

(ア) 地域住民による地域づくりの推進 (イ) 誰もが暮らしやすい生活環境の整備
(ウ) 京都府北部広域連携事業の推進、自治体間交流
(エ) 豊かな自然環境の維持と活用



※関連する主な持続可能な開発目標（SDGs）の17のゴールのアイコンを示しています。

参考資料6

野田川で石をひっくり返して魚を探す
子どもたち。石についた泥が流されて、
魚が食べるコケが育ちやすくなる

やばいっ！ つかまるところだった。
石の下にかくれてたのに、人間は恐るべしだ。
ぼくはドンコ。野田川の住民さ。
何だか最近、川の中がきれいになった。
エサもいっぱいいて、仲間も増えてきた気がする。
子どもたちにつかまるわけにはいかないけど、
こうして石を転がしてもらって、
川の洗濯になるんだって。
どういうことかって？ 裏面に書いてあるらしいよ。
それではまた、野田川で会おう。

うちの
まち
vol.09



TAKE ACTION
YOSANO BRANDING

汚れが多い ←

野田川の汚れの量

堂谷橋 75%BOD[mg/L]

→ 汚れが少ない



与謝野町は一つの川でできている。野田川だ。

流域は穀倉地帯。加悦谷平野を潤して阿蘇海へと流れ出る。

右のグラフを見てほしい。野田川の汚れは35年前の4分の1にまで減った。

そしていま、子どもたちの声が飛び交わせせらぎが、よみがえりつつある。

きれいになった野田川で、あなたも昔のように遊んでみませんか？

「清流野田川」あと一歩

宮津湾でとれたサケを、大喜びしながら触るで謝小学校の子どもたち（2015年撮影）



野田川で自然繁殖したとみられるシロザケの稚魚

汚れ激減 サケと子ども戻る

むくむくと入道雲がたちのぼった7月のある日、与謝野町後野の野田川に獲物を狙う子どもたちの声がした。「でっかいのがおる!」。加悦小3年の大江優美さん(9)は大きな石の下に魚の影を見た。網を構えて手で追い込むと、網が暴れた。手のひらよりも大きいアユだ。「めっちゃうれし!」。輝くアユを手に笑顔がはじけた。

野田川で遊ぶ「川の学校」が後野で始まったのは4年前。大江さんは毎年来ている。大物を手づかみしたら、もうやめられない。感想には「川の学校が毎日あったらいいな」と書いていた。加悦小2年の杉本大和君(7)は「もう一回やりたい。次はいつ?」と父和彦さん(45)を見上げた。和彦さんも小学生の時にナマズを釣って遊んだ。川の主のような大物を捕ったことは忘れられない。和彦さんは「自分が楽しかった体験を子どもにもさせてあげたい」と語った。そんな親子を見て、朝倉一博さん(68)は「川の学校を始めて良かった」と顔をほころべた。

1300年前 平城宮にサケ献上

後野の人たちが川の学校を始めたきっかけは、野田川でシロザケが産卵しているのを毎日新聞で知ったことだった。川の近くに住んでいても知らない人は多く、実際に60gを超える魚体が傷だらけになって卵を産む姿を見て「サケが帰る川を守ろう」という声は高まった。さらに調べると、1300年前の奈良時代には野田川から平城宮にサケを献上していたことも分かった。後野区民らはマイクロバスで奈良文化財研究所を訪ねた。そこには「丹後の国が與謝川(野田川)の生サケを天皇の食料として献上した」と記録した木簡(木の荷札)があった。当時の貴重なタンパク源。奈良の都で超高級品として知れ渡っていたらしい。「うちのまちの宝物は野田川に眠っていた」。そう気づいた区民は昔のように川に入ろうと話

し合い、子どもたちに魚のつかみ方を教えた。近

くで稲作を営む山村義信さん(68)は子どものころ、一升瓶の底を切って魚を捕る仕掛けを作ったことを思い出した。「土手のウロ(穴)に手をつまみ込むとな、ぬるっとするんだ。そっと手を広げて、ぐっとつかむ。そうやってでっかい魚を捕まえた」。話す顔はまるで少年のようだ。昔は水路で小さなフナがいくらでも捕れた。高度経済成長期にさしかかると、米の量産のために農業や化学肥料をたくさん使った。生活排水も流れ込み、気づけば川は汚れていた。川は田んぼに水を引くための用水路。遊ぶ場所ではなくなった。流域には水をせき止める堰が並び、「立入禁止」の看板が立った。幼少の頃、学校から帰るといつも川で遊んだ吉田元良さん(81)は、孫たちにも川で遊ばせてあげたいと願っていた。「60年かけてどん底まで川を汚したのは我々の世代だ。これから同じ時間をかけて美しい川を取り戻したい」。吉田さんは川の学校で子どもたちに語りかけた。「ご飯を食べた後も、どうか魚のことを思ってほしい。何でも排水口に流さずちょっとふき取る。その気持ちを大切にしようね」

野田川の支流の岩屋川には3年前、京都市伏見区から3人の兄弟がやってきた。嶋さん家族だ。川は自宅から歩いて1分。長男の蒼蒼さん(13)は透き通ったせらぎに息をのんだ。川に入って遊んでもここでは怒られない。次男の煌翔君(11)と三男の寿樹君(8)も水中メガネをつけて水に飛び込んだ。「冷たくて気持ちいい!」。近所の子も「何してるの?」と寄ってきて、エビや魚を捕るのに夢になった。近くに住む坂根義隆さん(42)はそれを見て懐かしく思った。父の畑仕事を手伝いながら、ここで魚を釣っていたのを思い出し、子どもたちに「酒団子」作ってあげた。小麦粉を酒で練ってある。小さくちぎって釣り針につけ、よどみに流すとウキがスイーッと

沈んだ。「今だ! 合わせろ」。でも、初めての子はうまく釣れない。坂根さんは「ちょっと貸してみな」と竿を手にした。茂みに隠れて餌を落とすと……。見事に釣り上げた。子どもたちは大喜び。坂根さんは子どもに竿を返すのも忘れ「これはやめられん」と再びウキを見つめた。

川を耕せば 魚が育つ

岩屋川の阿知江橋近くは昔、収穫した野菜の洗い場だった。洗濯中のおばさんがたらいでナマズをすくったこともある。水辺に降りる暮らしが残っていたおかげで、子どもの遊び場も保たれていた。しかし、今年7月の西日本豪雨は川を一変させた。山から流れ出た大量の土砂が、魚がすむ岩陰や淵を埋め尽くしたのだ。重機で砂が取り除かれるのを待つしかないと思いきや、市民の手で生き物のすみかをよみがえらせる方法があるという。川底に間伐材や土のうを並べて流れに強弱をつけることで、砂が運ばれて浅瀬と淵になるのを助ける取り組み。教えているのは、河川工学を応用して自然の回復力を高める「小さな自然再生」研究会。ロコミで全国に広がり、北海道や兵庫、福岡などで実践中だ。

川は洪水で生まれ変わるのをご存じだろうか? 雨で増水すると水の勢いが増し、川底の石が押し流されて表面の泥が洗い落とされる。その結果、魚が食べるコケや水中の虫が戻ってきて、魚も増えていくというのが再生の仕組みだ。子どもたちが魚を捕るために石を転がすと、川には洪水と同じような効果が表れる。「川を耕す」ことで自然を再生させようというのだ。研究会メンバーの滋賀県立大准教授、瀧健太郎さん(流域政策)は「魚を捕る子たちが増えると砂がかき混ぜられて川底が耕される。親子で遊んで、魚がウジャウジャいる川にしませんか」と話す。琵琶湖に注ぐ川では間伐材の魚道で1000匹を超えるアユが遡上した。野洲市では住民らがスコップを手に川に入り、川底の砂に砂利を混ぜ込んでピワマスと呼び戻そうと試みている。フカフカで水の通りがよい川底にすることで、実際に産卵も確認されている。

与謝野町でも試してみてもいいだろうか? ということで、うちのまちは11月3日に「生き物いっぱい 川づくり講座」を企画した。瀧さんを講師に招き、午前10時からは岩屋の上地会館に集まって岩屋川を歩き、午後1時からは後野地区公民館で野田川について流域の皆さんと考

える。町外からも参加できる。無料。予約なしの参加も可能だが、町商工振興課(0772・43・9012)に予約すれば人数分の資料を用意する。



生き物いっぱい 川づくり講座

2018年11月3日(土・祝) 参加費無料

10時~11時半 上地会館(与謝野町岩屋)

13時~14時半 後野地区公民館(与謝野町後野)

☎与謝野町商工振興課(0772・43・9012)

府は同町石川の堂谷橋で川の汚れ具合を示すBOD(生物化学的酸素要求量)を測っている。河川の環境基準値の代表的なもの一つで、川の水1リットルに含まれる有機物などを、微生物が食べて分解するのに必要な酸素の量を示している。数が低いほど良く、2mg/Lというのが普通の浄水施設で浄化ができるレベルだ。70年代、野田川はその基準を超えていたが、だんだん下がって97年以降は基準を下回り始め、08年以降の数値は30年前と比べると半以下になった。

京都市内の鴨川は87年に環境基準の5倍も汚れていたが、下水道が繋がって96年以降は基準以下を保っている。一方、野田川の流域には広大な田畑がある。生活排水だけでなく、肥料や農薬が流れ出る川に栄養が増えすぎて汚れてしまうが、生産者の意識も変わりつつある。町農林課は「大量に肥料を入れてたくさん収穫するより、米の品質にこだわって適量を与える方が主流になった。ほとんどの農家が田んぼの水を流出させないように工夫している」と話す。

北海道の尻別川や熊本県の川辺川など、BODが0.5mg/L以下の川を、国は「水質が最も良好な河川」と認定している。その水質を維持している一級河川は、全国で16カ所しかない。野田川も堂谷橋0.8mg/L、六反田橋では0.5mg/Lをクリアしていて、全国の清流に近い水質を保てるようになっているのだ。

近づく「最良の水質」

0.5以下

読者アンケート

「うちのまち」第9号をお読みいただきありがとうございます。ご感想や取り上げてほしいテーマなどを、はがき、メール、下のQRコードからアクセスできるアンケートフォームのいずれかでお寄せください。抽選で1名の方に「京の豆っこ米5kg」をお贈りいたします。2018年10月31日消印有効です。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。メール・はがきの場合は、お名前、ご住所、電話番号、ご感想を明記の上、右下記載の与謝野町商工振興課までお送りください。

